

日本醫史學雜誌

第13卷 第4号

昭和43年3月1日発行

原 著

杉田玄白の女「八百」……………緒方 富雄…(1)

大正3年の所謂「伝研移管問題」について

其の二……………安芸 基雄…(19)

比良野貞彦と解剖図譜……………松木 明知…(41)

わが国近世の手紙の読み方……………羽倉 敬尚…(49)

Kurze Geschichte von einem chinesischen Heilkraut

Tu Fu Ling 土茯苓 (Chinawurzel) ……大塚 恭男…(1)

例 会 記 事……………(52)

雑 報……………(54)

通 卷 第 1370 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2~1

順天堂大学医学部医史学教授室内

振替口座・東京15250番

動脈硬化治療剤

抗キニン剤

健保新採用

薬価基準 1錠 ¥52:00

アンヂニン

2,6-ピリジンジメタノール ビス(N-メチルカルバメート)

ANGININ

アンヂニンは、動脈硬化を治すことが実験的に証明された、世界で初めての薬物で、粥状動脈硬化部より粥状物を吸収治療に向わせます。

また、抗キニン剤として強い抗炎症作用の他、ユニークかつ強力な出血阻止作用と血栓予防作用を一剤に具える独創的新製品です。

適応症

1. 次の疾患に伴う狭心症症状
冠動脈硬化症、心筋硬塞、冠不全
2. リウマチ熱、慢性関節リウマチ
3. 脳血栓

包装

アンヂニン錠 1錠 250mg 20錠 100錠



製造発売元

万有製薬株式会社

杉田玄白の女「八百」

緒 方 富 雄

Yao, a Daughter of Genpaku Sugita

Tomio Ogata

一、杉田氏「八百」

森鷗外の「伊沢蘭軒」の「その二百八十二」につぎの文があつて、杉田氏八百という婦人が出てくる。

「嘉永六年は蘭軒没後第二十四年である。正月十三日に棠軒良安は家督相続をした。『跡式無相違大御目付触流被仰附』と、棠軒公私略に云つてある。（中略）

三月二十六日に里開をした。公私略に『里開、松川町実家へ行』と云つてある。田中淳昌の未亡人杉田氏八百の許へ往つたのである。

四月六日に棠軒の生母杉田氏が没した。公私略にかう云つてある。『六日午後実母公得卒中風、昏睡不醒、吐濁唾煤色、夕刻遂に御卒去被遊候。』八日に喪が発せられた。『表発は八日差出す。』（中略）

九月十三日に棠軒は山田昌栄の門人となつた。公私略に『山田昌栄先生へ入門』と云つてある。昌栄は蘭門の椿庭業廣で、家塾は本郷寺岐坂上にあつた。

棠軒は蘭学首唱者の家に育つた杉田氏八百の生む所でありながら、当時新に師を択ぶに洋医に就かずして椿庭に従つた。

しかしその伊沢氏の養嗣子たるを思へば、是も亦怪むに足らない。叔父柏軒の洋医方に対する態度は下に見えている。」ここに出てくる棠軒（とうげん）（一八三四—一八七五）は、伊沢蘭軒（一七七七一—一八二九）の子椽軒（しえげん）（一八〇四—一八五三）の女柏（一八三五生）の夫で、はじめ田中氏で淳良といったのを、伊沢家の養嗣子となって伊沢棠軒と称し、良安とあらためたのである。引用文のおわりに「叔父柏軒」とあるのは、椽軒の弟柏軒（一八一〇—一八六三）である。棠軒が入門した山田昌栄は名を業広といい椿庭と号した。蘭軒の門人で、すぐれた漢方家であったという。上野国高崎藩主松平侯の家臣である。棠軒の実父は田中淳昌。生母が「伊沢蘭軒」にいう「杉田氏八百」である。鷗外が書いているのは、嘉永六年（一八五三）のことで、すでに未亡人となっていた八百が没する前後である。

この記事よりすこしまえ、鷗外は「その二百十二」に、淳昌と「八百」についてつぎのように書いている。

「天保五年は蘭軒没後第五年である。他年椽軒の嗣となるべき棠軒淳良が、四月十四日因幡国鳥取の城主松平因幡守齊訓の医官田中淳昌の子として生れた。通称は鏐造である。母の名は八百、杉田玄白の女だと、歴世略伝に云つてある。玄白とは初代玄白翼であろうか。玄白は初め子がなかったので、建部氏伯元勤を養つて嗣とした。その後一児を挙げたのが立卿豫である。女の事は伝に見えない。勤と豫との女の事も亦同じである。杉田氏の系譜を識る人の教を乞ひたい。」鷗外が杉田氏の系譜にあかるくなかったのは無理もない。これが大体はつきりしたのは、ようやくちかごろのことで、石原明博士の功績である。それにもかかわらず、この「八百」が、石原博士の調査にはもれてゐた。それが、ふとした機縁から、わたくしが「八百」の杉田氏の系譜上の位置を決定することができたので、それを報告するとともに、「八百」の子孫についても簡単に紹介したい。

二、杉田氏の系譜と「八百」

今年（昭和四十二年）一月、「八百」のとついで田中家の子孫にあたる高橋幸子という方からてがみをいただいた。わた

くしの校注の「蘭学事始」(岩波文庫本)に出ている「杉田家系図(略)」に「八百」がないので、それについてのいろいろの疑問を書いてよこされたのである。

わたくしは、これを石原博士にとりついで。石原博士はさきに杉田氏の系譜についてくわしい調査を発表されたが(「杉田玄白の家系」(日本医史学雑誌第八卷第三・四号、昭和三十三年一月一五日)、それには「八百」に相当する人物がないからである。博士からの返事によると、「八百」のことはまだよくわかっていない。わたくしは、石原博士の返事のあらましを高橋さんに知らせた。

高橋さんは、玄白のはじめの妻「登恵」とのあいだにうまれた「八曾」と「八百」とのあいだに混同はないかと疑っていられたが、これについて石原博士の答は決定的であきらかに別人である。八曾は、安岡玄真(のちの宇田川榛齋)の妻となり、「蘭学事始」にあるように、のち離婚した人である。八曾は離別ののち再婚せず、某藩の奥女中となり、別に家を立て、同藩の藩士の子を養子として宗端を名のらせた。宗端が医を業としたかわからないそうである。八曾は万延元年(一八六〇)七月五日八十三才で没した。法名は延寿院長督知貞大姉。八百の没年は、嘉永六年(一八五三)四月六日である。

高橋さんはその後、親類の方々に問いあわせて、わかったところを知らせてくださった。そのうえ三月のある日、田中家の過去帳と、ほかに三点の資料「家筋書上」、「履歴書」、「於烈縁組入用襖記 嘉永四年辛亥年十一月 田中」をとどけてくださった。

この過去帳は、われわれに共通の疑問を解く有力なカギとなった。

三、「八百」の父母兄弟

過去帳には、田中家の故人の法名と没年月日のほかに、縁つづきの関係が丹念に書かれてある。ただし女子の俗名の記

入がないので、推理に多少手間がとれた。

まず問題の「八百」である。「八百」という俗名は過去帳には書かれていないが、「栄寿院松岩智貞大姉」の没年月日が「伊沢蘭軒」中の「八百」との全く一致することや、過去帳にしろされた縁つづきの関係から、玄白の女「八百」にあらたることはたしかである。

つぎに「八百」の杉田氏の系譜上の位置をきめるために、まず過去帳から関係人物の法名、命日そのたの記入を列挙してみる。縁つづきの記入は、多少文体を整理しただけである。法名のカッコでかこんだ部分は、石原博士その他によっておぎなつたもの、没年月日の下の西暦は、わたくしがおぎなつたものである。

- 一 栄寿院松岩智貞大姉（杉田玄白女、田中淳昌の妻）嘉永六年四月六日没（一八五三）
- 二 九幸院仁誉義真居士（杉田玄白、田中淳昌の妻の父）文化十四年四月十七日没（一八一七）
- 三 信受院教誉貞念大姉（田中淳昌の妻の母）文政十三年八月十三日没（一八三〇）
- 四 瑤池院（田中淳昌の妻の兄）天保四年五月二十一日没（一八三七）
- 五 五明院涼誉清境大姉（杉田伯元の妻、淳昌の妻の姉）弘化二年六月二日没（一八四五）
- 六 信敬院妙浄日心法尼（杉田立卿妹、淳昌の妻の姉）弘化元年十二月十七日没（一八四四）
- 七 梅顔院香誉妙薰大姉（杉田立卿の妻）天保八年二月四日没（一八三七）
- 八 梅里院（園誉秀香現奇居士）（杉田成卿、田中悌庵淳昌の子の従弟）安政六年二月十九日没（一八五九）
- 九 鶴林院（威徳松山居士）（杉田松鶴、注恭卿）文化十一年八月十四日没（一八二四）

最初の栄寿院（一）の命日は、うえに書いたように、蘭軒伝の「八百」との全く一致し、過去帳に、杉田玄白（二）の女で、淳昌の妻とあるから、栄寿院と「八百」とは同一人であることはたしかである。

さらに「八百」が杉田伯元（四）の妹（義妹）、伯元の妻（五）の妹（義妹）にあたり、立卿の子成卿（八）の従弟にあたることも、既知の系譜上の人々との関係と矛盾しない。

もうひとつ、過去帳ではっきりしているのは、「信受院教督貞念大姉」(三)が「八百」の生母(田中淳昌の妻の母)であることである。しかしこれだけでは問題は解決しない。なぜなら、玄白は前後二人の妻(登恵と「いよ」)をめぐったので、そのいずれかを決定できないからである。

ところで、「信受院」は、上述の石原博士の「家系」にある「26いよ」であることが決定的である。法名も命日も一致するからである。

これで、「八百」の生母は、立卿・藤・「そめ」たちの生母とおなじ「いよ」であることが確定した。

四、「八百」の系譜上の位置の決定

つぎに、一番重要な問題は、「八百」は、このきょうだいの何番目にあたるかである。

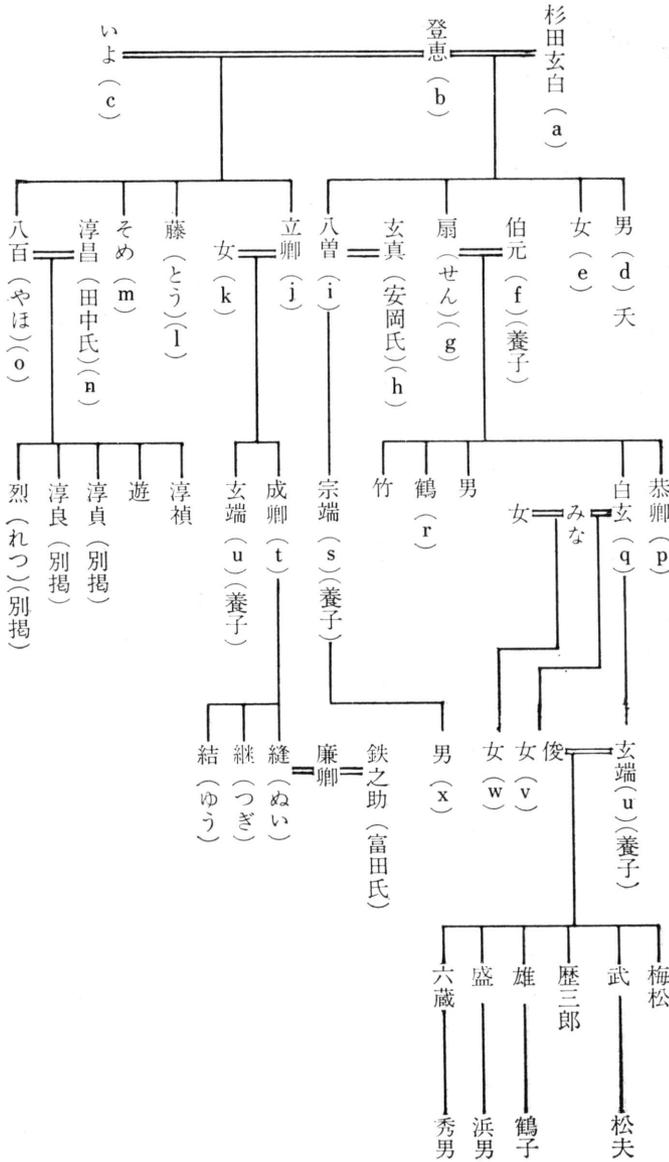
この問題をとくカギは、過去帳にも石原博士の「家系」にもあった。過去帳に「信敬院妙浄日心法尼」(六)という法名の女性がある。過去帳によると、立卿の妹で、淳昌の妻(すなわち「八百」の姉である。これにあたる人に「藤」と「そめ」とがある。石原博士がさきに発表された「31八曾」は「そめ」とすべきものでって、その法名と没年につけられた疑問符はとりさつてよい。

これで、「八百」は「そめ」の妹の位置におちついたわけである。しかし「八百」が末の子であるかどうかについて、よりどころにする記載がない。石原博士の家系によると、「そめ」のうまれたのは寛政三年(一七九一)六月十七日、その年玄白は五十九才であった。「いよ」の年令も、「八百」の生年もわからない。系譜にも他の人物が出ていないから、一応末子としておく。

杉田氏の系図を、石原博士の最近の補訂のものと、田中家の過去帳の記載とをつきまぜてつくと、つぎのようになる。

杉田氏系図

(石原博士の最近の補訂とを合せて)



(系圖の注)

- a 九幸院仁誉義真居士 文化一四・四・一七(一八一七) (八五才)
- b 淨心院清誉光顔大姉 天明八・一・二〇(一七八八) (四三才)
- c 信受院教誉貞念大姉 天保元八・一三(一八三〇)
- d 春了童子 天明四・一・一一(一七八四)
- e 天含童女 寛政一〇・一〇・二(一七九八) 酒井侯の女、故あって杉田家に入籍(杉田家記)
- f 瑤池院円誉淨照居士 天保四・五・二一(一八三七) (七一才)
- g 五明院凉誉清境大姉 弘化二・六・二(一八四五) (七十二才)
- h 弘道院殿遠誉普濟潤生大居士 天保五・一二・四(一八三八) (六六才)
- i 延寿院長誉知貞大姉 万延元・七・五(一八六〇) (八〇才)
- j 寿泉院得誉無疆楽道居士 弘化二・一一・二(一八四五) (六〇才)
- k 梅顔院香誉妙薰大姉 天保八・二・四(一八三七)
- l 不詳 寛政元・七・一八(一七九一) 生
- m 信敬院妙淨日心法尼 弘化元・一二・一七(一八四四)
- n 信庸院清誉淳昌居士 天保一一・一・一九(一八四〇)
- o 栄寿院松岩知貞大姉 嘉永六・四・六(一八五三)
- p 鶴林院威徳松山居士 文化一一・八・一四(一八一四)
- q 棋院 明治七・九・一九(一八七四) (七三才)
- r 鶴章院仙誉延寿妙算大姉 慶応三・九・二三(一八六七)
- s 孤竹院君誉寛進居士

- t 梅里院園譽秀香現奇居士 安政六・二・一九（一八五九）（四三才）
- u 吉野一得の男 明治二二・七・一九（一八八九）（七二才）
- v 誓光童女 文政一一・一二・二六（一八二八）
- w 玉仙院幾譽天寿大姉
- x 本光院良譽純道居士

五、「八百」の夫田中淳昌とその子孫

杉田玄白の女「八百」の系譜上の位置が決定したので、「八百」の子孫について簡単に紹介しておきたい。

「八百」がとついで田中淳昌は、鳥取城主因幡守齊訓なかなむねに仕えた医官である。田中氏は代々漢方医として藩侯に仕えた。田中家に「家筋書上」と「履歴書」と題した二帳の由緒書がのこっている。前者は天保四年十二月（一八三三）田中淳昌がまだ祐碩といつたころに書いたものであり、後者は明治四年（一八七一）十二月田中裕篤がその後の履歴を加えて整理し清書したものである。代々の勤め向きの履歴をくわしく記入したもので、田中氏歴代の事蹟をしらべるにはよい資料である。ここではそのなかから歴代の姓名没年等をぬき出して紹介するにとどめる。

田中氏は田中松与が元祖で、享和八年（一七二二）五月十一日藩侯に召し出されて医官となり、二十人扶持をもらった。

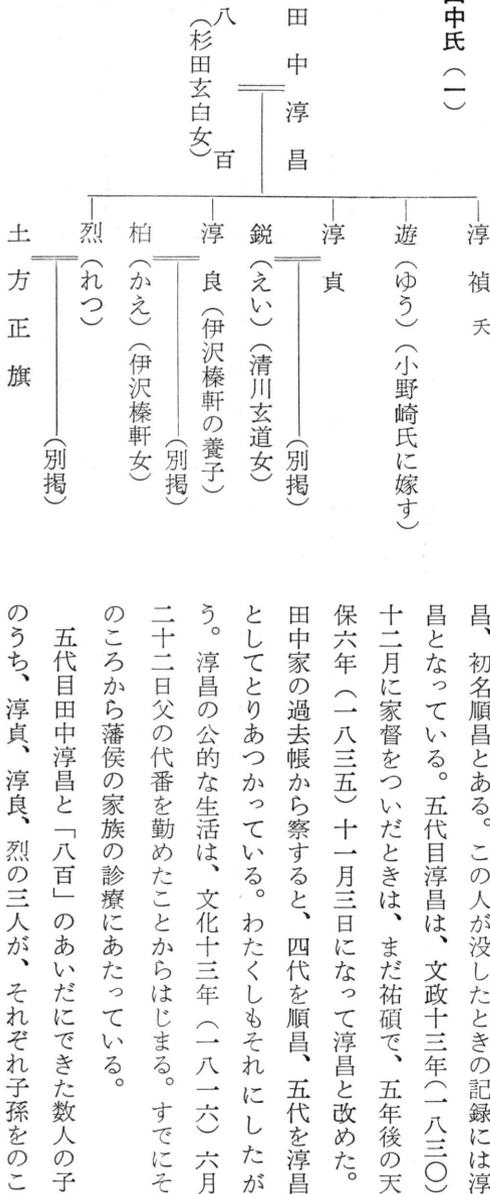
「洪江通玄院殿御弟子兼而通玄院殿御頼医事も宜相勤候ニ付、此度被召出二十人扶持被遣。追而御知行三百石可被遣旨被仰渡候。」

ただし知行三百石の方はなかなか実現せず、二百石の知行があたえられたのは、ようやく四代目順昌のときである。「八百」の夫淳昌はこの初代松与からかぞえて五代目にあたる。田中家の記録と過去帳を総合して、歴代を列記する。

初代 田中松興 享和十九年四月二十八日（一七三四）没 浄縁院実誉玄證居士
 二代 田中松隨 安永三年十月十七日（一七七四）没 法性院通誉道達居士
 三代 田中瑞仙（養子） 天明七年十二月八日（一七八七）没 本空院浄誉惠智居士
 四代 田中順昌（養子） 文政十三年八月十日（一八三〇）没（履歴書に天保元年八月十一日没とあるが、天保への改元は十二月十日であるから文政十三年が正しい。また八月十一日没とあるのは、過去帳によって、十日をとる） 良即院辨誉順昌居士
 五代 田中淳昌 天保十一年正月十九日（一八四〇）没（履歴書には正月二十一日とある） 信庸院清誉淳昌居士

淳昌ははじめ祐碩といった。父（四代目、養子）も、はじめ順昌をとなえ、のち淳昌となった。由緒書には、四代田中淳

田中氏（一）



昌、初名順昌とある。この人が没したときの記録には淳昌となつている。五代目淳昌は、文政十三年（一八三〇）十二月に家督をついだときは、まだ祐碩で、五年後の天保六年（一八三五）十一月三日になつて淳昌と改めた。田中家の過去帳から察すると、四代を順昌、五代を淳昌としてとりあつたついている。わたくしもそれにしたがう。淳昌の公的な生活は、文化十三年（一八一六）六月二十二日父の代番を勤めたことからはじまる。すでにそのころから藩侯の家族の診療にあたっている。

五代目田中淳昌と「八百」のあいだにできた数人の子のうち、淳貞、淳良、烈の三人が、それぞれ子孫をのこ

した。

淳昌の長子淳禎ははやく没したようである。

なお過去帳に淳昌の子という法名が二つある。

即 生 童 子 文政十二年三月二十二日（一八二九）没 淳昌の子

信憲院徳誉淳碩居士 天保八年四月十六日（一八三七）没 淳昌悻

また別に「淳昌の娘」と記した「水夢童女 文化十一年十月二十一日（一八一四）没」がいる。

淳禎の妹「遊」は、過去帳に

厚真院淳誉貞秀善女 明治三年九月八日（一八七〇）没 田中悌庵姉小野崎遊

とあるのが、その人である。

六代目田中悌庵ははじめ淳貞である。悌庵もまた医師として君侯に仕えた。没年月日は過去帳には、文久三年（一八六三）三月二十九日、履歴書には、元治元年（一八六四）二月朔日とある。過去帳には命日を三月二十九日としているから、田中家の命日を無視するわけにいかないであろう。法名は医徳院顕誉悌庵居士。

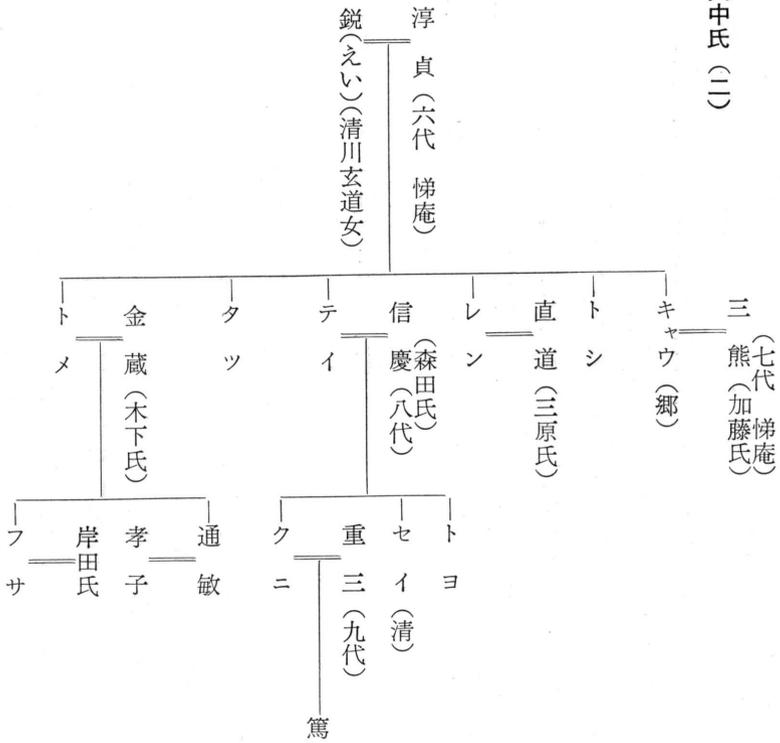
悌庵の妻は、漢方医家として名の高かった清川玄道（一七九二—一八五九）の娘である。清川玄道のこととは鷗外の「伊沢蘭軒」の随所に出てくる。玄道は医師榎本玄昌の次男で、蘭軒に学び、その世話で清川金馬の養子となった。蘭軒伝は蘭門の五哲として、渋江抽斎、森枳園、岡西玄亭、山田椿庭とともにこの清川玄道をあげている。

悌庵の弟淳良は伊沢家に入り、末女烈は土方正旗にとついでから、田中氏は悌庵の子孫だけである。

六代悌庵には男子がなく、女子ばかりであったので、加藤貞白の子三熊を養嗣子として長女キャウ（郷）に配した。これが七代悌庵である。やはり医をもって藩侯に仕え、明治四年（一八七一）八月二十六日に没した。法名は顕勝院聴誉信友居士。妻キャウは明治四十五年（一九一二）三月七日に没した。知勝院顕誉郷友大姉。

キャウの妹（次女）トシについては不明。三女レン（鍊）の夫は三原直道。四女テイ（貞）は養嗣子森田裕馬（信夫尚

田中氏 (二)



貞の門人)の妻となった。この人がのち八代田中信慶となる。過去帳によると、信慶の実父は松本善次郎であるという。森田氏と松本氏の異同はわからない。なお信慶裕篤が七代悌庵の掎養子になったのは、明治四年(一八七二)十月十日である(履歴書)。それは悌庵の死後である。この事情はわからない。信慶は大正五年(一九一六)六月二十日に没した。積徳院瑞誉信慶居士。妻テイは昭和七年(一九三二)四月二十一日に没した。累徳院功誉貞善大姉。

過去帳によると、信慶に何人か子がうまれているが、信慶の長女清子(セイ)は、明治四十年(一九〇七)一月十日に没して、法名を智明院清誉浄圓大姉という。そのほかには九代の重三の妻となったクニ(国)がいるだけで、系譜にあるトヨのことがつまびらかでない。重三はクニの養子となり、昭和十三年(一九三八)七月二十七日に没した。法名誠光院信誉三道居士。クニは現存の田中国子さんである。

六、田中淳良(伊沢棠軒)とその子孫

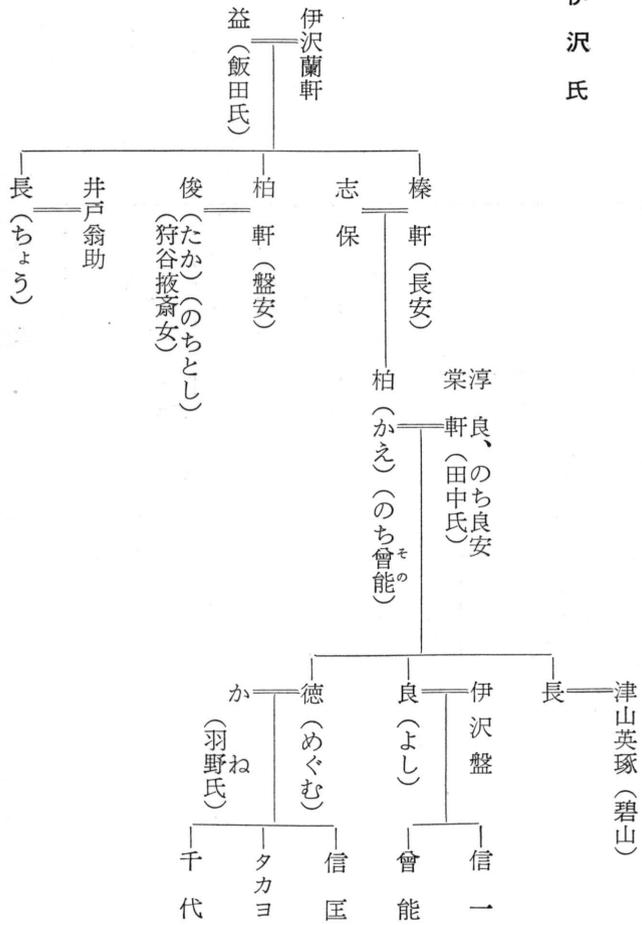
伊沢家に入った淳良(一八三三—一八七五)は蘭軒の子榛軒(一八〇四—一八五二)の養嗣子として女柏^{かえ}の夫となり、伊沢棠軒となった。そのときから淳良を良安とあらため、のち長安、春安を名のった。

蘭軒(一七七七—一八二九)のことは「伊沢蘭軒」にくわしいが、福山藩の侍医で漢籍にすこぶる通じ、考証学者、集書家として特異の人物である。子の榛軒も弟柏軒(一八一〇—一八六三)も蘭軒とおなじ環境に生活した人である。柏軒は盤安といって、のち幕府の漢科の奥医師となった。緒方洪庵(一八一〇—一八六三)が文久二年(一八六二)から三年(一八六三)にかけて奥医師として勤めていたときの日記「勤仕向日記」に、伊沢盤安の名がよく出てくる。蘭科と漢科と立場はちがっても、二人はことばをかわしあった同役であった。柏軒(盤安)の妻俊^{たか}は考証学者狩谷掖斎(一七七五—一八三五)の二女で、柏軒と同じ年令(一八一〇—一八五七)である。才女で「今少納言」といわれたという。蘭軒伝の「その二百十六、二百十七」にくわしい。

業軒のことは、その妻柏かしわとともに、「伊沢蘭軒」の随所に出てくる。業軒の子のうち、ながく生きたのは、「長」「良」のふたりの女と、「徳」とである。

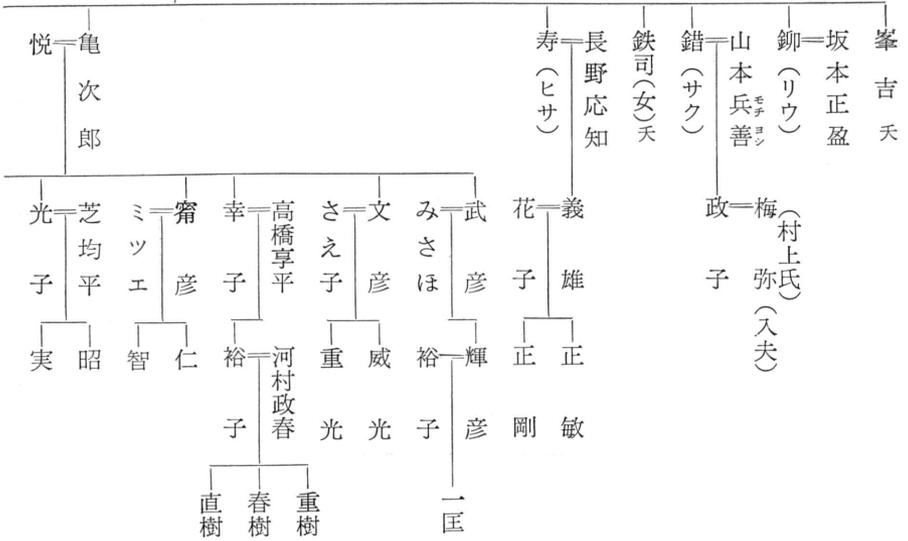
「長」がかたずいた福山藩侍医津山英琢（碧山）については、蘭軒伝の「その三百五十」に出ている。「良」の夫伊沢盤と、「徳」については「その三百六十八」にくわしい。左に伊沢氏の系譜中おもなものをかかげる。

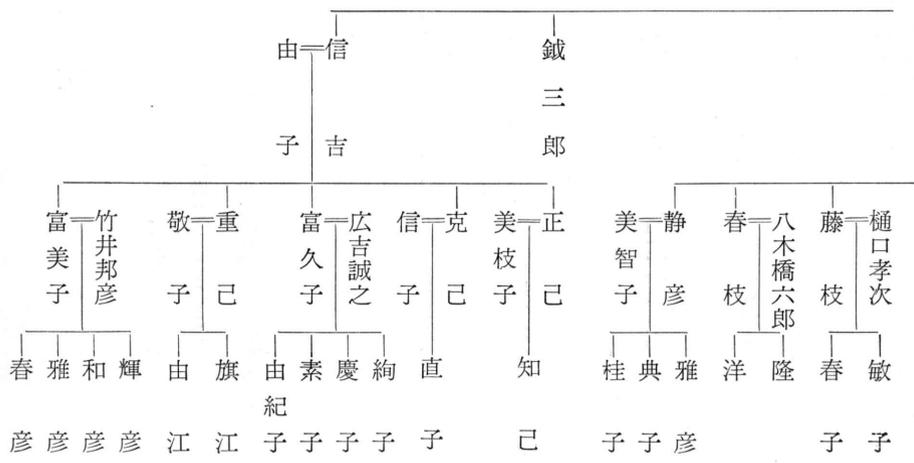
伊 沢 氏



土方氏

土方正旗
 烈(れつ)
 (田中淳昌二女)





七、烈の夫土方正旗とその子孫

「八百」の末女烈は、姫路藩主酒井侯に仕えた十一代土方伴六正旗にとつぎ、八人の子をうんだ。高橋さんのお知らせによると、土方氏の祖先は、徳川氏が岡崎城主であったころの最初の家臣で、のち酒井侯に召されて三河の郷土尾崎氏から土方氏を創始、明治維新まで酒井侯に従って厩橋（前橋）より姫路に住み、七代以後は江戸本邸詰となったという。

八、むすび

杉田玄白の女「八百」という婦人が、田中淳昌の妻として、森鷗外の「伊沢蘭軒」に出てくるが、鷗外は「八百」の杉田氏の系譜上の位置のことには深入りしなかった。「八百」のついで田中家の資料も、その点をあきらかにすることができなかった。一方杉田玄白研究者たちには、「八百」の実在が全く知られていなかった。

このたびふとしたきっかけから、わたくしに提供せられた田中家側の資料と玄白研究者側の資料をつきあわせたところ、両者にそれぞれ欠けていたところが都合よく補いあって、いろいろなことがはっきりした。

「八百」は、杉田玄白の後妻「いよ」のうんだ子で、長男が立卿、長女が藤、次女が「そめ」すぐ下の妹で、多分いちばん末の子にあたる人であった。

杉田氏「八百」は漢方家田中淳昌にとつぎ、数人の子をうんだ。うち淳貞（佛庵）は家をつぎ、漢方家清川玄道の女「鋭」をめぐって、子孫をのこした。その弟淳良は、漢方家、考証家伊沢蘭軒の子榛軒の養嗣子として、榛軒の女「柏」の夫となり、伊沢棠軒良安と名のつた。長女遊は小野崎氏の妻となり、末女烈は土方正旗にとついだ。

田中氏も伊沢氏も、また田中佛庵の妻の生家清川氏も、伊沢柏軒の妻の生家狩谷氏も、すべて鷗外の「伊沢蘭軒」「渋江

抽齋」で活躍する漢方家である。杉田玄白の子孫が蘭学の世界に生活していたのと、いちじるしい対照である。

杉田玄白の女「八百」が蘭方医の社会から漢方医の社会へ移ったため、蘭方の社会から一時すがたを消す結果となったが、「八百」の入った小社会がたまたま森鷗外の興味をひいたため、「八百」にも焦点が合うことになった。

かえりみれば、「八百」の杉田氏の系譜上の位置を決定することができたことは、杉田玄白の系譜にたいしても、森鷗外の「伊沢蘭軒」にたいしても、はっきりとした補遺をしたことになろう。

また「八百」の系譜上の帰属について、すくなからぬ不安を感じていられた田中家の子孫のかたがたにも、多少はお役に立ったことであらう。

観点をかえると、この「八百」の婚姻によって生じた、蘭学の創始者、蘭方医学の先駆者杉田玄白の家系の人々と、漢方医学の家系の人々とのあいだの交際がどのようなようであったかをさぐることは、なかなか興味ある問題とおもわれる。

おわりに、杉田玄白の女「八百」にわたくしの注意をむけさせ、貴重な資料を提供して、この文を書くきっかけをつくってくださった高橋幸子さんに御礼を申しあげる。

また、石原明博士の長年にわたる杉田氏家系の調査に敬意を表し、このたびそれが一段と完成にちかざいたことをよろこびたい。

本稿は昭和四十二年十月二十八日の日本医史学会例会でその要旨を発表し、のちそのときの討議にもとずいてさらに増補整備したものである。また昭和四十三年一月二十日の蘭学資料研究会でも紹介した。

Summary

In *Ogai Mori's* well-known novel "The Life of Ranken Izawa" *Yao* appears as a daughter of *Genpaku Sugita* (1733-1817), the pioneer leader of Rangaku (Dutch learning) and western medicine in Japan. *Yao* married to *Junsho Tanaka* who practised Chinese medicine.

On the other hand, *Yao* remained entirely unknown to medical historians interested in *Genpaku Sugita*. Based on hitherto little known reliable materials and literature the author concluded that *Yao* was the third and probably the youngest daughter of *Genpaku Sugita*. Her mother, *Iyo*, married to *Genpaku* after his first wife.

Iyo gave birth to *Rikhei Sugita* (eldest son), *Tao* (eldest daughter) and *Some* (second daughter) before *Yao*. *Yao* had several children of whom two sons and two daughters survived.

(論文抄読)

Gernot Rath : Ein unbekannter Brief
Edward Jenners aus dem Jahr 1799.
Sudhoffs Archiv. Beiheft 7 (1966), S.
178-142

著者はゲッティンゲン大学の医史学教授である。ジェンナーが牛痘接種法を発表したのは一七九八年六月末であるが、その翌年の二月一四日の日付で、ドイツのハンノーバー王国のバルホルン G. T. Balhorn に書いた手紙について紹介している。バルホルンは友人のストローマイエル Chr. F. Stromeier と共にハンノーバーにて最初の牛痘接種を一七九九年五月にジェンナー方式で実施した。しかし結果がジェンナーの云うほどでないで、質問と「牛痘物質」の分与を乞う手紙をだし、それに対してジェンナーが答えたのが、こんど発見された手紙であると思われる。バルホルンはジェンナーの原著 Inquiry をドイツ訳して一七九九年に出版した人であり、ストローマイエルは幕末の日本の外科に大きい影響を与えた G. F. Louis Stromeier の父である。この手紙といっしょに送られた牛痘苗を用いて、バルホルンとストローマイエルの接種は成功し、この新しい方法がハンノーバーで認められ、ヨーロッパ大陸で根をひろげる一因となったのである。(T・O・抄)

大正三年の所謂「伝研移管問題」について 其の二

虎の門病院神経科 安 藝 基 雄

Situations of the Transference of the National Institute for Infectious Diseases
in Tokyo from the Ministry of Home Affairs to the Ministry of Education
in 1914. Part II.

Motoo Aki, M. D.

Department of Neurology,
Toranomon Hospital, Tokyo.

四、考察

(1) 移管の発議者

第二次大隈内閣において、伝研移管の発議者が果して誰であったか。北里伝は語らず、北島は「必ず運動している人があるであろう」との北里の推測を伝え(資二)、「北里先生もこの度の移管問題は青山と大隈との仲がよくて、青山から出ておると考えなければならぬ、それと書記官長江木翼氏等の説から出て居ると考えられた。」とも述べている。田端日記は「大学ノ青山ガ大隈ヲ動かセルナリ」と、北里の言葉^(山)を記している(資一五)。これらはそのまま青山が持論を「主治医の地位を利用して大隈に進言した」とする川上武の見解に連なるものであるが、更に積極的に青山自身の策謀となす意見

については長与はじめ大学派が、青山に対する侮辱としてもっとも鋭く反撥したところであり、一方、そのこの北島らの意見、あるいは北里側とみられる医海時報の論説⁽²⁾などを見て、結局は青山を主謀者とする見解をとってはいない(後述)。

この点につき青山の積極的役割を否定するならば、大隈の役割を重視できなくなるのは当然である。また青山伝には、大隈内閣の書記官長として行政整理にシテ役をつとめた江木の言として、「立案者は青山博士が大隈首相を説いたからどうのかうのといふやうな天降りの考慮の下に立案したのではないことを断言する。」という一節が見出されるが、それが誰かは明らかにしていない。これに對しさいきん塩沢香は、「どうせ大隈さんなんて上置なんですから」と言い、さらに「企画実行すべて江木書記官長の手から出た」ことを強く主張しているが、これには若干の疑問がある。江木は伝研移管当時四十一才、すでに老令の大隈が「閣内の機務一切を挙げて内閣書記官長たる」江木に一任していたことは事実とみられるが(一木回顧録)、問題の事務的処理はともかくとして、伝研移管の企画実行すべてが江木一人によるとして果してすむものであろうか。当時の関係閣僚としては内務大臣兼務の大隈の他に、文部大臣一木喜徳郎の名を逸することはできない。一木こそは内務省との関係がもっとも深く、大学のみならず伝研の事情にも精通した閣僚であった。北島も「文部大臣はそのとき一木さんで長く内務省に居た人であつて内務省側の消息にも通じているから、文部省側の人が主に計画をして内務省の人はあまり知らない」と云う経過をとつておつた」と述べている(北島伝)。一木は後年伝研移管を回顧して、

文部省では別段整理する仕事も無いが、出来るだけ経費を節減することとし、其の代り教育系統に属すべき各種の機関を文部省に集めることとし、内務省所管の伝染病研究所、農商務省所管の水産講習所を……文部省に所管換を行ひ、前者は大学の医科の後者は同じく農科の附属にせんとした(一木回顧録)。

と、きわめて淡々と述べているが、これに對し一木の果した積極的役割を示唆する意見のあつたことは注目される。すなわち、移管終了後半年余を経たのちの記事であるが、医海時報は某大官談として次の消息を伝えている。

「一木の腹では移管の有無は別問題とするも、多年内務省を中心とせる北里一派のやり方を密に苦々しく思うてゐたのである。何かの機会を捉へて其矯正を断行しようといふ意気込でゐたのであつて、是は必ずしも今日に始まつたこと

ではない。内務次官在職時代より此の考はあったのであるが、その機会を得なかった、一木から云へば一種の信念となつてゐたのである。」（医海時報、大正四年六月十九日。）

遺憾ながら某大官とのみでその名は明らかにされていらないが、この記事が必ずしも荒唐無稽なものでないことは、伝研を北里が私物化しているという、在来からの根強い批判からして十分考えられることであり、一方一木の経歴からも理解できぬことではないのである。

今日となつてその真相を明らかにすることはほとんど不可能であるが、北里の「嗜好は金銭で無く、寧ろ之を散ずることであつた」といわれ、「常によく散ずるので世間よりは富豪の如く見られた」一面があり（北里伝）、結核治療のため設立経営してきた養生園、あるいは血清痘苗製造販売のいわば独占的企業の態をなした伝研の経営に關係して、北里に疑惑を持たしめる一因がなかつたとは言えまい。これが伝研創立以來つちかわれた伝研あるいは内務省における北里の声望と相まって、政府が「苦々しく思う」余地は十分あつたものと察せられる。

一方一木についてみれば、大学を卒業して内務属となつた当時の内務大臣は山県有朋であり、一木は山県からとくに目を懸けられ、その配下の官僚として出世した。彼がたまたま内務次官たりし第二次桂内閣時代に起つた事件としては、幸徳秋水らの大逆事件、さらに日韓併合が想起されるが、この際一木が権力執行の中枢的位置にあり、警察監獄等を掌握していた内務次官の要職にあつたことは忘るべきではあるまい。後に改めて触れるが、北里の属していた東京医学会の母体である大日本医学会は医師の構成も雑多である反面、ややもすれば政治的に傾く性格を持ち、従つて政府にとっては必ずしも好ましくからざる一勢力であつたと考えられるのであつて、その意味において一木が内務省管下にある伝研内の北里一派の行動に不快、危惧の念を持つたとしても必ずしも不思議はなく、この面から移管を企図したとしても十分理解し得るところである。

要するに伝研移管の問題は、大隈でなく、青山でなく、江木でなく、おそらく当時文部大臣たりし一木喜徳郎より發議されたものであつて、その後四回の閣議を経て十月二日の閣議で最終的に決定されたとする医海時報の記事（大正四年六

月十九日)は真実に近いものであろう。そしてこの間実務担当者として江木が奔走したのは青山伝の述べるごとくであらう。

(2) 大隈重信

当時首相内相を兼ねていた大隈は、すでに七十才の高令であった。国立伝染病研究所の前身である私立伝染病研究所をうみ出す母体となった大日本私立衛生会では、伝研移管を「徳義上決して無視すべき事件に非ず」とし、理事長金杉英五郎及び理事遠山椿吉が十月三十一日大隈をたずね(資六三)、

第一 内務大臣閣下は我大日本私立衛生会と伝染病研究所との歴史的関係を知らざるか、

第二 内務大臣閣下は如上の関係を知るも之を無視するか、

第三 内務大臣閣下は私立の公益団体杯は一顧の価値なき者との趣旨なるか、

の三点につき質問を行つたが、大隈の「答弁は縷々数方言なれども多くは余等の質問に関係なき通論的事項」にすぎず、要するに「多年の宿論」である「学文統一主義」により類似の科目はみな一箇所に集めて各学者をして一堂に研讃討議せしめ、學術の進歩發達をはかるのが目的で、「実は天下大に之を歓迎するならん」と期待して伝研移管を實行したというのであった。

本来大日本私立衛生会が、その「最も重要な事業たる伝染病研究所を政府に寄納」したのは、かならずしも自ら好んだのではなく、「政府の命令如何ともする無き」によつたのである。従つて、一には永久之を内務省の所管に置き各伝染病の原因及予防治法を研究せしめ国家衛生法の審事機関たらしむること、二には永く此事業を北里に任せることが内務大臣の命令書として示されていた。

このため十一月八日の私立衛生会總會での報告(資七六)の中で金杉は、「第一、此移管を其成立及性質の全く異りたる工部大学校、司法省学校、開成学校(皆官立にして寄附行為にあらず)等の合併問題と同一視するが如き第二、伝染病研究所は名は研究所なれども固とは是れ衛生行政上の審事機関なれば行政上の必要条件相生じて初めて研究するの副事業を

なす者にて学文の研究を主とする処にあらずとの觀念なきこと第三、明治三十二年三月我大日本私立衛生会が政府の内意に遵ひ北里博士の決意に聴き貴重の公共物即ち研究所在来の家屋備品全部を政府に帰納したる趣旨を全く没却して顧みざらぬ結果であるとした。「要するに今日の如き事件の突発すべき事は本会の予想せざる処にして、かくと知りしなば如何に政府の命令とは申し乍ら我大日本私立衛生会は之を無償にて政府に帰納せざりしものと今更後悔に堪へざる次第であります。之を政府に帰納するの可否に就ては其当時本会理事長衛生局长たる長谷川泰氏、理事柳下士興氏と二昼夜に渉る論戦を継続し、副会頭長与専齊氏の避難旅行等有名なる一大事件勃発し、長谷川氏は無償寄納、柳下氏は寄納不可論（不得已れば有償寄納論）、長与氏は両方に賛成したる訳にて実は世上に現はれたるが如き一小事にはあらざりしなり。其騒動は当時長与長谷川両氏より余に宛てたる書面に由て全般を知るを得る、今日となつては当時一般に粗暴漢と評せられたる柳下氏の先見の明に驚く次第であります。」

また十一月一日には早稲田の私邸で記者の質問に答え、「全体伝染病研究所なり、北里門下なりは、今度の整理問題に就きては、大なる感謝を以て我輩に対すべきである。抑も今回の転管は正しく學術の独立を認めたる結果文部省に合併したのである。」と言ひ、さらに「此基礎（崇高なるサイエンスの学理）の上に築かれたる学者先生等が、理の観易きことをも顧みずして自ら感情的根拠に由来する愚論には、吾輩少しも耳を藉すことは出来ぬ。学者でも門下生でも、如何程反抗すとも我輩は毫も意とするに足らぬ。」（医海時報、大正三年十一月七日）と述べた。大隈にとつては移管反対は「感情的根拠に由来する愚論」にすぎず、本来移管は北里らが「大なる感謝をもって」対処すべき事態であつた。「学者学問の尊重」「崇高なるサイエンスの学理」など、空々しい美辞麗句をならべてはみても、所詮大隈の胸裡にあつたのは、権力の座にある為政者の否みがたい優越感であり、世論の大隈に対する非難の一部は、つねに官学の弊を痛罵し学問の独立を絶叫しつゝありたる大隈伯が総理大臣として且つ内務大臣として大学の研究以外行政上最も必要なる自由研究所を官学の奴隷たらしめたる矛盾を責めるにあつた。（日本医事週報、大正三年十月二十四日）。医界の長老である石黒忠恵が移管の

非なる所以を説得しようとしたのを、にべもなく一蹴した（医海時報、十月三十一日）のを見て、大隈の言う学者尊重の具体的内容を察知せしめるに足るのである。

従って伝研移管についての閣議決定を北里に伝えるに際しても、「上官たるの故を以って、一属僚を願使するの態度に出で」たというのはおそらく事実であろう。世論が湧き立つに及んで大隈の態度も些か改められたかに見えるが、大隈が北里と「初めて会われたときにもう少し親切に話をして行かれたならば、諒解もされたであろう」と北島が言った（資二）のも故なきことではなかったのである。

(3) 青山胤通

青山の態度は伝研移管問題の焦点の一つであるが、当時青山を批判した論説も、単なる憶測にいでたものが多く、具体的資料は極めて乏しい。しかし当時の医科大学長であり、移管後の伝研所長として尽瘁した青山の立場を究明することなくして、この問題を論ずるのは無意味であるから、以下数点にわたって在来の疑問に対する解答を試みたい。

(一) 伝研移管は青山の画策によるものかどうか。

すでに触れたごとく、移管の「直接の原因は青山胤通が『研究機関は文部省の管理たるべし』との持論を主治医の立場を利用して大隈に進言したためである。」とする川上の見解は、かならずしも新しいものではなく、当時の与論もこの点については青山に対し全体として批判的であった。従って青山の弟子たちが、「根も葉もないこと」と言い、青山の立場を弁護するに急で、移管と青山が無関係であることを極力主張したのもうなずけるところである。とくに青山伝は一章を設けて、「生前に於て、誤解のままに終った」「先生の冤を雪がねばならぬ」とし、「閣議で決定した後青山が引受けた」に過ぎないと述べている。執筆は鶴崎熊吉であるが、多数の有力者が原稿につき「厳密なる審議を重ね」「事実の正確を期」したことが例言に強調されており、大学側のほぼ公式の見解とみることができ。それによれば、大隈内閣の書記官長江木が事前に青山をたずねそれとなく大学側の意向を探ったことになっており（資三）、別の日に外科学教授佐藤三吉に對しても同じ趣旨の質問をしたことが、「大学側に陰謀めいた運動のなかった」証拠にあげられており、結果的にはあく

まで非公式に大学側の意向を探るにとどまったことを主張しているのである。

青山と大隈の交遊は、実に明治二十八年以来のことであるが、後年の青山は「毎週金曜日に大隈邸を見舞ひ、晩食を共にして帰るのが定り」で、「家族に病人がないと碁を囲むか、色々な問題について議論するかして刻の移るを忘れた」(青山伝)。従って久しく親交のあった二人の間で伝研移管が話題にのぼることがたどえあったとしても不思議ではなく、「主治医の地位を利用して大隈に進言した」とする解釈も必ずしも不当ではない。しかしこれを青山の策謀と取るべきかどうかについては、今日なお疑問が多く決しがたい。

もし伝研移管を検討した閣議が四回にわたり行われたとすれば、この間に大隈と青山がかなり具体的な話しあいをする¹⁰⁰こともあったであろう。というのは最後の閣議で伝研移管が見た当夜には、大隈は早速青山にその旨を伝えたと考えられる十分な理由があるからである(後述)。大隈が伝研移管について、北里門下が大なる感謝を以てこれを迎えると考えていた(前述)のがもし事実であるならば、当初の青山の樂觀にもそれなりの理由があったこととなる。

当時大学側と接触の多かった北島も、「文部省の方で青山さんが大隈さんにたいへん近かったものだから、そういう案が青山から大隈さんにつきこんだという説があったが、移管の根源的というものは決して一朝一夕に始まったのではない。この研究所を大学に移したいという案はよほど前からあった」(北島伝)として、間接的に青山策謀説を否定している。結局青山の策謀は具体的に裏づける資料がなく、青山の性格態度からみても、それを肯定する根拠はなく、北里はともかくとして弟子たちはこの点は認めざるを得なかったのである。

(⇒) 青山は閣議決定前に伝研移管を知っていたかどうか

青山伝によれば、青山が事前に少くとも「それとなく」意見を求められたことは事実であった(資三)。しかも移管実施後、所長就任問題に関連して私邸をたずねた記者に対し、青山は個人的に意見を聞かれた点を否定し、帝国大学の評議会¹⁰⁰に対し諮問があったと述べている(資四)点は注目せねばならぬ。帝国大学令第八条によれば、大学評議会の任務は次の如くであった。

第一 各分科大学ニ於ケル学科ノ設置廃止ノ件

第二 講座ノ種類ニ付諮詢ノ件

第三 大学内部ノ制規但勅令又は省令ヲ發スルノ必要アルモノハ其ノ建議案

第四 学位授与ノ件

第五 其ノ他文部大臣又ハ帝國大学総長ヨリ諮詢ノ件

評議會ハ高等教育ニ関スル事項ニ付其ノ意見ヲ文部大臣ニ建議スルコトヲ得

当時伝染病研究所はすでに世界的規模の大研究施設となっており、大学への移管の是非については、少くとも常識的にはこの第八条第二特に第三により大学の評議會に對し当然諮問せらるべき筋のものであったことは疑いを容れない。この意味では青山伝(資三)では、かかる公式の諮問について全く触れていないが、青山自身の發言(資四)が十分取上げらるべき理由がある。当時青山は医科大学長であつたから、他の教授一名(誰であつたかは不詳)と共に、医科大学を代表する評議員の一人であつた。しかしもしここで医科大学の代表として諮問に答えたとしても、さらに医科大学の教授會に報告し、その意見を尋ねるのは、もちろん評議員の裁量にゆだねらるべき事であつたと思われる。「我医科大学へは諮問も何もなかつた」というのは、この件を青山が正式には教授會にはからなかつたことを指すのであろう。事実、伝研移管發表前にこの問題が教授會の議題となつた形跡はない。明治四十一年以来衛生学の教授であり、北島の親友であつた横手千代之助も、「あれは教授會に一度も諮つてない」という点を、青山が移管を主張して運動したのでないことを説明する理由の一つとしてあげている(北島伝)。また医海時報は大学教授會の意向として次の如き消息を伝えている。

尤も当日該(研究所移管)問題が正式議案たらざりしにより討論は見ざりしと雖も、教授中より質問的批難を青山博士に加へ殊に某教授の如きは斯の如き重大事件に關して文部省より相談を受けながら青山学長一人にて是非の回答をなすが如きは教授會の存在を無視するものなりと真正面より攻撃し、其声に和し平生青山学長に快らざる教授連は一斉に喰つてかかり、緒方博士は研究所を医科大学に隸屬せしむると共に衛生学教室の改造を謀るべしと青山博士が他に漏

せしを手厳しく詰り、流石の青山博士をして顔色を失はしめたりしは実に意外とする所なり、当日解剖の小金井が「伝染病研究所問題で君が文部大臣に安請合をやったといふことだ果して真乎。若し然りとせば、君は教授会の存在を無視し従来の慣行を打破するものにあらざして何ぞや」と舌鋒鋭く青山の急処を衝いた時、青山は何と答へたか、「何れ決定の上相談する積りであった」(医海時報、十月三十一日)。

この記事をそのまま信じることの可否はもろろん軽々に決しがたいが、緒方や小金井が青山を詰ったという一節の如きは、単なる捏造とは考え得ぬ具体的問題を指摘しており、全体として一面の真実を伝えたものと見なしてよいであろう。もし大学評議会に對し何等公式の諮問を行わず「それとなく」青山の意見を探るにとどまって、しかも一氣に移管を断行したのであれば、これは政府の専横と言うほかはあるまい。しかし例えば一木文相は嘗ての法科大学教授であり、大学の事情には明るかつたはずで、ここまでの専横を敢て行ったとは考えがたい。青山伝の記事(資三)もその意味では評議会への諮問を積極的に否定するものとは考えがたく、やはり青山の言として伝えられる如く(資四)、評議会に諮問はあつたと解するのが、当時の制度の上からみても穏当ではあるまいか。しかも諮問は青山の胸一つにとどまって、医科大学教授会の議題とまではならなかつた。これについて、医科大学長青山に専断のきらいはなかつたかどうかは判断の余地でない。直情径行の為人、大隈との関係、あるいは鷗外をしてシュトルツと評せしめた性格を考えると、その懸念は一概に否定し去るべきものとは思われない。

当時の伝研は、「地所が二万坪もあつて、そこにある設備というものは、その当時の日本においては、大学などでは見ることのできない完全な設備であつた。冷蔵庫や遠心器など立派なものを持っており、血清とかワクチンとかを処置する装置も日本ではほかにどこにもなかつた」(北島伝)。一方伝研移管に先立つわずか二ヶ月、青山は伝研を批判して、

「若し金を沢山かけたり、設備の完全なるが故、立派な学者先生が出来るとか、大業績を仕遂げ得るかといへば決してソウではない。北里の伝染病研究所の如きは設備も完成して居る。金も歳々二十余万円を費して居るが、乍遺憾近來新らしく同所から何等の仕事も出ぬではないか。」(医海時報、大正三年九月十二日)

と言った。江木の質問に対しては、「大学に移して別に悪いことはあるまい。其の所管がいづれにあるにせよ、今の遣方には改革を加へてよきさうに思ふ。」と答えた(資三)。「特に熱心に移管を主張しなかった」としても、伝研に対してははっきりと批判的な意見をもち、移管にも決して反対でなかったと考えるのはむしろ当然の結論ではあるまいか。

(三) 閣議決定後の青山の態度

青山が伝研移管の閣議決定を知ったのは何日であろうか。「十月にはいつて間もなくのある日」青山は長与に「いよいよ伝研の移管がきまつたらしい。」と言った(資七)。しかしそれは十月七日より「数日」前のことであつた(資二三)。當時青山は「毎週金曜日」に大隈を訪れて晩食を共にしており、しかも閣議決定のあつた十月二日はたまたま金曜であつたから、その夜青山が大隈と会つた可能性はいたつて大きく、その際大隈から直接伝研移管決定の知らせを受けたと考えなければ、長与伝の記事(資七)は理解しがたいものとなる。従つて長与伝のいう「十月にはいつて間もなくのある日」は、おそらく十月三日(土)にほかならぬことになるであろう。

一方、「非常に乱暴なことだ、これは大変なことになるのじゃないか。」と青山が心配したという田宮の追憶談(資八)は、長与伝の記載と相応しない。むしろこれは「問題にならねばいいが」という長与の危惧(資七)を、おそらくはそのまま青山の言葉の中が含ませてしまつたのであつて、すでに四十年余を経て当時苦境にあつた青山を回想追慕する弟子の真情が、おのずからこの調子をなしたものと解すべきであろう。

「内務省に管轄されるより我々同様最高学府にして學術の濫輿を極むるを目的とする帝国大学内に入れられる事は強ち悪い事ではあるまいし又便利な事だと信ぜられる。」という当時の青山の発言(資三八)も、青山が移管を是認肯定していたことを具体的に示すものであろう。当初青山はむしろ事態を樂觀していたと考えられる。すなわち「北里も、門下も、共に辞職しないよ。」と弟子たちに言いつづけ、長与の注意にもかかわらず、「北里および一門の辞職を予想しようとしなかつた。」(三田村篤志郎)。「北里はやめるにはおよばぬ。われわれといつしよに勉強すればよい」と青山はたびたび医局で語っている(今村荒男)。「実のところ青山学長はこの問題がさう紛糾に陥らうとは予想してゐなかつたらしかつた。」一

方青山は、「或は、北里博士だけはその立場上辞任するかも知れないが、それ以下の技師たちは同時に大学へ移って、それぞれ教授、或は助教授の椅子に坐って、従来通り伝研技師を兼務するものであらうと考へてみた」(長与伝)。「北里は辞任しない」というのはおそらく青山の希望であり、「北里だけは辞任するかも知れない」というのは、おそらく彼の認識であつて、かならずしも矛盾するものではなく、いずれも青山の真情を伝えたものであらう。青山としては嘗て北里を大学に迎えることを考えたこともあり(北島)、伝研移管についても閣議決定を経て勅令として公布されれば、結局は北里も大学に来ると樂觀していた面がおそらくあつたのであらう。しかしこの点についての青山の希望は完全にくつがえされた。十月七日には北里は内務次官に今回の件につき談判している(資一七)が、辞職の決意がすでに固まつている以上、「談判」という言葉の意味は単なる相談とは解しがたく、おそらく政府に対する非難と、彼の決意表明を含むものであらう。しかも同日技師たちは殉死の覚悟を固めており、北里のみか技師たち全員の辞職の見通しは、日ならずして当事者には明らかになつた。長与が十月十日に北里に会つた際にさえ「今社会は殆ど北里博士の辞職を想像してゐる」(長与伝)という言葉がみられることでもおよそ察知し得るであらう。

青山としては早くから移管実施を知つていただけに、いまとなつては急遽その対策に腐心せざるを得なくなつたのは、やがて伝研を引きつぐべき医科大学の長としての責任上、けだし当然と言ふべきであらう。具体的に彼がとつた最初の処置は、十月十日北里に縁故のある長与を呼んで、北里が文部省ひいては大学に転ずるよう斡旋を依頼することであつた(資一九)。しかし、「北里だけは辞任するかもしれない」という予想をうちに秘めた留任工作が、どれだけ切実な勧告あるいは懇懇たり得たであらうか。従つて青山から斡旋の依頼を受けた長与も、公式の学長代理となることを拒否、単に一個人として、北里の辞任の決意がどの程度のものであるかをたしかめる以上のことはしなかつたのである(長与伝)。

そして伝研移管は一つの勅令であつた。すでに勅令が出た、勅令は背くべからざるものである——青山が当初北里は辞職しないと考へ、政府もまたこの点について樂觀的であつたとすれば、その理由の一部は勅令に対する当時の時代意識の中にあつたのであらう。そして北里一門の辞職は、その意味では大学派の人々にとっては重大な国家的背反であり、結局

許すべからざる行為であつたとみななければなるまい(後述)。そして辭職必至の情勢を見るや、青山が具体的な動きをみせるよりまえに、大学側に早くもこれに対処する活潑な動きが出て来ているのは、ここにその原因の一端がある。私は青山が長与に斡旋を依頼する前日の十月九日、伝研移管と並べて賀古鶴所の来話を書きとめている鷗外日記(資一八)に注目せねばならないと考える。賀古と鷗外が伝研移管について語りあつたとすれば、青山の立場なり大学全体の意見なりが、そのまま鷗外に通じたとして何の不思議もないからである。

そのころ「あざみ」という雑誌が出ておつた。これは非常に粗末な体裁の雑誌であつたが……その時代の風潮としてとかく北里攻撃が主になる。何でも時事のことを書いて、変な悪口を書いたり批評したりすることがその雑誌の主たる眼目であつた。……初めは東大の若い者が書いておるのだなと思つておつたが調べてみると、それは決してそんなに若い人のやつておることではない。青山先生一派と陸軍の有名人、つまり小池だとか、賀古鶴所だとか、森鷗外とかいうような陸軍の主たる人が連合でつくつておる雑誌だということがわかつて、私らもちょっとびっくりした(北島伝)。

というやうな青山、賀古、鷗外らの既往の言論活動からも、伝研移管問題を受けとめた鷗外、賀古の態度はおよそ推測される。高木兼寛、長谷川泰、長与専斉、佐藤進等の指導で明治二十六年結成された大日本医会は明治三十一、二年ごろもつとも活躍したが、恰もこの時、東京大学出身者を中心とする明治医会が、青山胤通、賀古鶴所、川上元治郎、遠山椿吉、田代義徳、入沢達吉らによって組織され、医師法制定をはじめとして事毎に大日本医会と対立した。北里は明治三十四年以来大日本医会の一身分である東京医会の会長であつたが、これに呼応した関西連合医会が相提携して、明治三十六年帝国聯合医会が組織されると、北里はその会長に推され、つねに明治医会と反目する立場に置かれた。大学側の攻撃が北里に集中したのも故なきことではない。しかも伝研移管当時鷗外は陸軍医務局長、軍医総監の要職にあつた。従つてこの日の鷗外、賀古の面談は、もちろん直接青山の依頼によつて行われたと断定はできないとしても、少くとも賀古は内面的には大学側の意向を代弁したものと考えられ、すぐ翌日の鷗外及び西沢、八木沢による伝研移管問題討究と無関係と

は、いかにも考えがたい点を強調しておきたい。

十月十五日には、鷗外は小池正晁¹⁰⁸を通じて北島の説得を試み、かつその結果を直接にはなく、わざわざ賀古を介して青山に通知している(資三二)が、これも鷗外、賀古、青山の本問題に関する密接な関係を具体的に示唆するものである。

長与伝の述べるごとく、青山が北里だけは辞任するかもしれないと考えていたことはおそらく事実であり、青山自身が長与を動かして引留めを策す一方では、賀古の協力を得て早くから鷗外と密に連絡を保ち、北里辞職後の事態にそなえていたと考えるに十分な理由がある。賀古と青山との密接な関係をみても、賀古が青山の意を帯して行動したと考えるのは決して不当な解釈ではあるまい。しかも青山が長与に依頼するにせよ、あるいは鷗外に委嘱するにせよ、問題を教授会にはかった形跡は全く見られず、その点「教授会の存在を無視するものなり。」との非難(前述)を想起せしめる一面のある点是否定できない。後に述べるごとく血清製造の成否が最高学府としての大学の権威を失墜させるという以上に、何ら教授会にはかることなく、医科大学長の一存で、軍医の協力によって辛うじて危機を切抜けたこと自体が大学の真の権威失墜にならなかつたであろうか、改めて問わねばならぬ問題の一つである。

(4) 森鷗外

十月十日、本来移管問題には直接関係のないはずの鷗外が、移管後の伝研において血清分野を担当して重要な役割を果たした陸軍軍医学校教官、西沢行蔵、八木沢正雄の二人とともに「伝染病研究所問題を討究」している(資二〇)のは、まさに注目すべき事実と見なさねばならない。

西沢自身の懐旧談によれば、十月末に八木沢と共に鷗外をたずねたことになっていたので、止むを得ず資料としては十月末の部(資六四)に掲げたが、その内容は明らかにはじめて鷗外から伝研移管を聞き、血清製造を引受けるよう指令され、「全く夢想だもしたことのない意外のことで、唯范然として……」と当時の驚きが述べられており、十月十日すでに鷗外と伝研問題を討究した二人(資二〇)が、十月末に改めて鷗外からまた話を聞き范然とするとは、如何にも腑に落

ちない。また少くとも鷗外日記に関するかぎり、西沢八木沢が二人そろって鷗外に会うのは、十月十日（資二〇）、を別とすれば十月二十五日（資四七）以外になく、「朝西沢八木沢研究所に行きて帰途来訪す」とあるのも、血清製造をはじめ鷗外から指令されたはずの二人が、そのまえに伝研に立寄るとは理解しがたいことである。これはむしろ、すでに準備成って「余等は移管に先立ち養生園に北里先生を訪問し、涙を振って別離を告げ」と西沢懐旧談にある日に該当し、その帰途報告のために鷗外のもとに立寄ったと解するのが最も穏当であろう。

また十月二十四日の鷗外日記に、福原文部次官より大嶋陸軍次官宛の手紙が、西沢八木沢の伝研任用に触れていることを述べている（資四二）のは、その前日に鷗外が福原次官と伝研問題について話した（資四〇）その内容の一部を示唆するものであって、このときすでに西沢、八木沢の承諾を得て、その伝研任用が決っていたと解釈せざるを得ない。同じ二十四日「西沢を呼びて論ず所あり」（資四二）とあるのも、十月末に西沢八木沢が鷗外からはじめて血清製造の指令を受けたとは納得しがたい点である。

いずれにせよ、西沢が十月末と記した出来事（資六四）は、鷗外日記（資二〇、四〇、四二、四七等）の示唆する如く、おそらく十月十日であったに相違ないと判断せざるを得ない。とすれば、「千思万考二日」の後、「奮励努力する」旨返答したのは十月十二日となり、大学と交渉を開始して、青山、林、長与に連絡し、交渉のため幾回も大学に往復し、総長にも会い、血清製造申継の諸準備を整えるのに十分な時間的余裕を見出すことができる。おそらく軍医総監たる鷗外が、早くから伝研移管問題に関与していることが漏れば社会的に問題となる公算が大きいので、十月末に至ってやむを得ずして動いたとする形をとったのであろうか。

十月十四日、青山が鷗外を訪ね、「依囑する所」があった時（資二五）には、すでに長与を通じて北里の辞意の固いことがはっきりしている（資二）反面、北里を大学に迎えようとする青山の努力に並行して（おそらくは青山の了解を得た賀古、鷗外の協力による裏面工作によって）軍の協力を得て伝研移管を遂行する見通しが立っており、それを青山が医科大学長として正式に依囑するためのいわば公的訪問だったのではないであらうか。

鷗外は青山と「頗る親交の間柄」であつたから、「青山先生の困惑を援けてやろうとの先生の俠氣」が働いたことに不思議はなく、「青山先生が思いもよらないものを引受けて公人として困っているのを、多年の盟友として座視するに忍びない」として動いたのであるという（西沢懐旧談）。しかし時間的には、青山や政府が社会的非難をあびて窮地に立つよりよほどまえから、鷗外の具体的行動ははじまっていたとみるべきであろう。表面に立たぬとはいへ、動きはかなり積極的である。しかも現職の軍医である西沢八木沢らを伝研に送りこむことは、単なる個人的友誼だけで許されてよい性質のものでないのは余りにも明らかである。十月十五日一木文相と面談している点（資三）をみても、これはもちろん鷗外の軍医総監としての公けの立場において遂行した人事であるとみなければならぬ。さればこそ「現職で、陸軍大臣の命令に依て、文部省の伝染病研究所の技師の仕事させなければならぬやうな憐むべき有様になって居る。……陸軍省にさう云ふ冗員が沢山あればもう些と行政整理をやつたならば宜からうと思ひます、現職の儘で伝染病研究所の仕事させると云ふが如きは、殆ど職司紊乱である。」（八木逸郎、議會質問演説——医海時報、大正三年十二月十九日）という当然の批判を招きもしたのである。

伝染病を中心とした衛生業務が軍陣医学において占める役割はきわめて大きいので、すでに世界大戦に参戦している立場からも軍が伝研の事業の中断をおそれただろうことは、もちろん理解できるのである。しかし一方この軍の動きは、能うかぎり内密にはこぼれた印象が深く、西沢八木沢の就任も十月二十七日はじめて新聞紙上に報道されたにとどまる。しかも事實はすでに十月十日、鷗外が西沢八木沢とともに伝研問題を討究していることの意味については、さきに論及したとおりである。この間の事情については、まだ伏せられたままに残る問題があるかと思われ²⁰る。従つていま、この問題にこれ以上立ち入ることはできないが、その根底にある鷗外の心理を何とか辿り、その動機を求めることは許されぬであらうか。

鷗外は明治十四年医科大学を卒業して陸軍入りをしたが、同級生中鷗外と同時に陸軍に入った小池、賀古、谷口、江口ら六名はすべて陸軍の給費生であり、鷗外だけがそうでなかった。彼は卒業後ただちに文部省の官費留學生となることを

希望し、自ら運動もしたのであるが、成績が二十八名中八番で、留学生は三名にかぎられていたので、医学部長の三宅秀から洋行は断念せよと申しわたされたのであった。

鷗外の陸軍入りについては諸説があるが、鷗外より賀古宛の手紙に「……然レハ矢張双親共ノ意ニ遵ヒ陸軍省ニ出仕ノ外ハ無御座候^㉑」とその事情を伝えている点はやむなく両親の意向に従ったとみることもできよう。しかし一方同じ賀古は「卒業する前に陸軍から成績の好いのを七人ばかり来てくれと云ふ話があった。本も沢山買ってくれるし、洋行もさしてくれる、馬にも乗れると云ふので森なども喜んで行つた」と書いており、文部省の留学を断念した鷗外にとって、当時の軍は他の官職、たとえば大学の助手などに比べ比較にならぬほど待遇がよかつたこと、研究や留学を保証したこと、また鷗外自身の中に軍の力を借りて政治的に活動したい意志があつたことなどは否定できない。そして鷗外が衛生学という政治や経済の力に頼らざるを得ない学問を専攻したのもこの意志の反映である(唐木順三)。森於菟の「父は政治家の方に向ふ野心をかかなり持つてゐた、」鷗外自身の「良相とならずは良医となれ」の言葉もそれをうら書きしている。

軍医鷗外は洋行の実現に積極的であつた。明治十六年三月、欧州出張の陸軍病院長橋本綱常に随行を志願して容れられなかつたが、六月に軍備拡張に伴う留学を上申し、翌十七年には小池、谷口らに一歩先んじ希望の留学を実現させている。陸軍々医としては四人目の留学であつた。そして公私ともにはなやかな四年間の留学生生活をドイツですごしたのであるが、当時のドイツはもとより医学水準は日本よりはるかに高く、しかも細菌学の成果もめざましく、実験的医学こそ医学の本道であるとの認識を彼にうえつけたのである。

しかるに留学を終えて帰国した鷗外に与えられたのは軍医学校教官の職であり、箝口令にひとしい待遇であつた。当時の陸軍部内には第一線の実験医学的研究を推進する素地はまだ無かつたものと思われる。鷗外の衛生学上の純業績は、歐洲留学の四年間と其前後のわずかな期間にのみ限られている(森於菟^㉒)。やがてうっ積した鷗外のエネルギーのはけ口は戦鬪の啓蒙活動、西洋医学一元論をたてとする多くの医事評論から医事論争へと展開され、ついには自らを傍觀機関となし、医界の中心勢力であつた元老たち、直接の上司石黒忠恵を老策士と見立てる論争にまで及ぶのである。ここに後年の

鷗外に見ることのできぬ、みずみずしい勇気を感じとることもできるが、幕末より明治にかけて西洋医学の紹介普及に大いなる貢献をした先輩を一括して反動ときめつけるあたり歴史的理解にも欠けるところが、軍職のゆえに、彼のいわゆる「真学者」たるの道をそれざるを得なかった鷗外の心理の屈曲を見のがすわけにはゆかないであろう。

さらに明治三十四年十月十八日、賀古宛の手紙には注目すべき次の一文がある。「……小生ガ入ルトイフ事モアラバ小生モ一番新規時直シニ衛生学ノ大勉強ヲヤラネバナルマイト存候²⁴」これは鷗外の小倉左遷当時、おそらく親友の青山あたりが東大に彼を迎え入れようと働らき、賀古を介して内意をさぐったのに対する鷗外の返答であるが、迎えられるは必ず用意のある胸のうちを物語っている。東大には青山のほか義弟の小金井良精、同期の三浦守治らもおり、結局実現はしなかったものの、鷗外を迎え入れる地盤があったのも事実である。

「森という人はおそろしく出世したい根性の人だった」(幸田露伴)。陸軍にあって軍医総監、医務局長の最高地位に進んだ鷗外であったが、そのためには真学者の位置を退かざるを得なかった。それだけに真学者の最高権威である官学教授の地位にも執着があったのである。そして歿年まで帝室博物館総長、図書頭を勤めた鷗外の在野期間は、陸軍の要職をひいた大正五年から六年に至るわずか二年足らずである。移管をいさぎよしとせず自ら野に下った北里と、小倉への左遷をあえて耐えしので中央に復帰した鷗外とは、明治期に活躍した人物としてまさに対照的な二つの典型を見ることができよう。

この鷗外に権威というものを大切にしようとする考えのあったのは否定できず(唐木順三)、また大学を偏重する考えがあったことも当然であろう。正規の課程、高校―帝大―といった系統だった学問を経ていない学者に対する不信は抜きがたいものであり、「例えば開業試験を経た医者、国家医学の一斑を講習した医者は鷗外にとつては信用がおけない」反面では、帝大出のある不良軍医の罷免についての相談に対し、「君、あれは系統だった学問をしてきた男だからね」と答え「学問から一步もぬけ出していなかった」一面を示したことも伝えられている。伝研が明治二十一年以来研究志望者の入所を許し、三ヶ月を一期として細菌学の大要を知得せしめ、わが国の衛生行政の發達に貢献したことは多大であるが、お

そらくこれも、たとえば研究生の資格その他につき鷗外のよしとせざる一面を免れなかったものと信ぜられる。また鷗外には人間的好悪が相当はげしく、北里の大家たることを認めても、「反動のためにかつがれている事をいましめた文章や、北里の業績について論ずるあたり……何となく冷たいものが感ぜられる」(河村敬吉²⁰⁷)。緒方正規を日本のペッテンコオフェル、北里をコッホにたとえながら、前者を豪傑、後者を才子と評するあたりにも、間接的に北里に対する評価がうかがえる。要するに「人間は青山の方が正直だからなア。」との鷗外の言(山田弘倫²⁰⁸)も、彼の好悪の念を別にしては理解しがたいものであろう。

西沢に対して鷗外は「研究所員は総辞職をするといふので、今後の血清を引受けるものがこちらにない。緒方は出来ぬといふので青山もハタと困ったが今更、どうすることも出来ぬ。ソコデ陸軍から君達を出すことにしたのである。」と言った(資六四)。当時衛生学教授であった緒方が血清を引受けることが出来ぬと言ったのは、おそらく北里や伝研に対する道義的理由だけではあるまい。²⁰⁹「実はその当時大学では血清ワクチンについて細菌学では聞いたのでございませうが内科学、臨床方面では誠に軽んじておったといっておかしいですけれど、どうも余り重きをおかなかつた気味がありました。自分の不明を申すようでありませうが、血清とワクチンとは一体どんな差があるだろうかというようなことをその当時の若い連中は言い合つたようなことでした。ですからこれを乗り切るためには首脳者の苦心というものは大変なことであつたろうと思うのです」(宮川米次²¹⁰)。北里の名を不朽にとどめた血清療法を大学側がことさら軽視した印象は否めないものであるが、また、衛生学教室の改造を謀るべしと青山が他に漏らしたのを、「緒方が手厳しく詰」つたような事情(前述)も、あるいはあつたかもしれない。

しかし結局は技術的にもただちに引受けることができなかったというのがおそらく真相であろう。そしてもし血清製造が中断されれば、衛生行政に重大な破綻を来すばかりでなく、時の政府、さらに「最高学府」としての大学の権威をまで失墜せざるを得ない。この事態を座視するに忍びないというのが、青山の友人鷗外として以上に、公人としての鷗外の大義名分ではなかつたのであろうか。

すなわち、青山に対する鷗外の援助は、彼の俠気のみで説明し得るものとは思われない。ここに鷗外の「自信力と決断力の非凡」を見る（西沢）ことは見る人の自由であるとしても、彼の北里に対する人間的好悪の念と、官学中心の思想が少なからぬ動機をなして、陰密に、しかもかなり早い時期から鷗外を動かしたものと覚しく、ここにむしろ軍医鷗外の人間性における一つの限界を感じないわけにはゆかない。³⁰³

いずれにせよ、ひとたび伝研移管問題が起るや、鷗外としては当然自明の態度をとったものであろう。その動きは表面的には消極的であり、やむを得ず力を貸したごとくに見えるが、おそらくは早くから青山らの相談にのり、この好機をとらえて、彼の信ずるところの反動の道を封じ、大学強化の役割を果たしたのである。鷗外の積極的な関与なしには、政府あるいは大学側が窮地に立たざるを得なかったのは明白であり、その意味からも改めてさらに深く、彼の立場を究明する必要がある。

註 (1) 江木翼は、文部省の舅父を以って目せられ官学擁護の強い主張者として知られた後の枢密顧問官江木千之の養子で、明治三十年東京大学法科卒業後、神奈川県事務官、法制局参事官、拓殖局長を歴任、第三次桂、第二次大隈、および第一次加藤内閣の書記官長をつとめ、後に民政党の知恵袋といわれた能吏であった。

(2) 医海時報は北里を崇拜する田中義一に経営され、主筆は内ヶ崎騰次郎で、移管当時の論調からみても、北里系の新聞と解して差支えないと思われる。

(3) 医海時報（大正三年十月十七日）は発議者を大隈と見なし、閣議後「数日を出でずして（文相が）山川総長、青山学長等を招致して転管沙汰を相伝ふると共に其経営の任に堪ふるや否やを確めたり」と述べ、更に「閣議の当日、文相は突然松浦専門学務局長を首相官邸に招いて血清痘苗のことについて聴聞するところありしが、局長は其意の何たるかを解するに苦めりといふ。」と伝えている。

(4) 「北里研究所五十年誌」八一〇頁、北里研究所、昭和四十一年。

(5) 一木喜徳郎は明治二十年東京大学政治学科を卒業、一時内務省に入り、ドイツ留学を果して明治二十七年法科大学教授となり、その後内務書記官をも兼任し、明治三十五年には法制局長に任ぜられ、官界と学界の双方にまたがる活動をつづけ、明治三十九年には大学教授を辞して純然たる官僚となり、第二次桂内閣（明治四十一年）当時は平田東助内相の下で内務次官をつとめた。この経歴よりみても、大学の事情に明るのみならず、内務省ひいては伝研の実情にも通じた人物は、当時の閣僚中一木その他には

求めることはできないのである。なお一木には官僚としての「保身に汲々」たる一面があり、法学者の立場にも怯懦な後退の見られる点については、家永三郎の指摘するところである（家永三郎、「日本近代憲法思想史研究」、一四〇—一五〇頁、岩波書店昭和四十二年。）なお伝研移管の閣議決定は、十月六日の紙上報せられたが、七日一木は記者に対し、「閣議決定のみならず其の議の問題に上れることすら之を聞かず何等かの錯誤に出づる誤伝ならん」とて、一言のもとに否定した（日本医事週報、大正三年十月十日）。当初政府が秘匿につとめた状況がうかがわれる。

(6) 明治二十三年六月二十六日内務省官制（勅令第一〇八号）によれば、「内務大臣ハ地方行政、議員選挙、警察、監獄、土木衛生、地理気象、社寺出版、版權、戸籍賑恤及救済ニ関スル事務ヲ管理シ、中央衛生会、警視総監及地方官ヲ監督ス」とある。

(7) 大日本私立衛生会雑誌、第三七九号、附録第三十二次総会記事

(8) 青山徹蔵、佐藤三吉、入沢達吉、稲田童吉、真鍋嘉一郎、坂口康蔵、林春雄、長与又郎、木下正中他。

(9) 佐藤三吉は青山伝の稿本朗読会に参加しており、従って青山伝のこの記事は佐藤の承認を得ているものと考えられる。

(10) 明治十四年六月十五日太政官を以て文部省所轄官立学校図書館教育博物館職制が改定され、東京大学職制にも大改正が行われたが、同年七月二十九日には東京大学事務章程が定められ、八月二十日増補されて、はじめて大学諮詢会が設置された、これが大学評議会の前身にあたる。ついで明治十九年三月一日勅令第三号帝国大学令が制定されるとともに、東京大学は東京帝国大学となり諮詢会は評議会に改められ、評議員は文部大臣及び各分科大学教授より各二名を特選して之に充て、任期は五年であった。さらに明治二十五年九月八日勅令第七十五号を以て帝国大学令第八条及び第九条が改正され、評議員は各分科大学長（法科大学長を除く）、法科大学教頭及び各分科大学教授各一名（互選）を以て充て、任期は二年に改められた。当時は帝国大学総長は法科大学長の職務であった。明治二十六年八月十日勅令第八十二号を以て再び帝国大学令が改正され、評議員は評議員に改称されたが、その構成に変化はない。

(11) 各分科大学にはじめて教授会が設けられたのは、明治二十六年の帝国大学令改正によるのであるが、「分科大学ノ学科課程ニ関スル件、学生試験ノ件、学位授与資格ノ審査、其他文部大臣又ハ帝国大学総長ヨリ諮詢ノ件」を審議するのが主な任務であった。

(12) この医海時報の記事を引用して、日本医事週報（大正三年十一月七日）は、「三大学十二三の専門学校を見渡しても現今の各部長の足許に寄りつく程の者はない。」赤痢の志賀氏、サルバルサンの秦氏等、「三大学各専門学校の教授皆々多士なりと云へども一人として如此名声ある医学者を持って居らぬじやないか」と反論している。

(13) 「思い出の青山胤通先生」、一七六頁、青山先生生誕百年祭準備委員会、昭和三十四年。

(14) 「医学者十話（一）」、昭和三十八年十一月二十六日、東京毎日。

(15) この言葉の中の「社会」という字はいささかおかしい。というのは新聞の報道が十月十五日であったという点からみて、まだ社会一般は十分にこの事件を知っていなかったはずだからである。ここでいう社会とは具体的にはむしろ、長与あるいは青山らの大学派の人々や政府当事者と解すべきであろう。

(16) 賀古鶴所は、明治十四年大学卒業後、緒方正規に師事して細菌学を研究し、のち軍医学校ではじめてこれを講じた経歴がある。

明治二十六年渡独して耳鼻咽喉科学を学び、帰朝後陸軍々医学校で耳鼻咽喉科学を講ずる傍ら、日本赤十字社病院に於て耳鼻咽喉科外来診療をはじめた、この方面での開拓者である。晩年は「東京帝国大学五十年史」の編纂に尽瘁し、大学の事情に精通していた。青山とも「頗る親交の間柄」であったが、森鷗外とは同級であり、同じ陸軍で働いた関係もあって、「無二の親友」であり、終生水魚の交を結んだ。

(17) 實在した雑誌であろうが、資料として確認はできなかった。

(18) 小池正晃は男爵陸軍々医中将小池正直（鷗外の前任医務局長）の長男。明治十七年生、明治四十二年九月九州帝大医学部卒業、陸軍に入った。北島多一の義兄にあたる。

(19) 西沢は明治三十五年、八木沢は明治三十九年東大出身の軍医で、伝研で指導を受け、北里の門下生でもあった。

(20) たとえば、鷗外から賀古宛の手紙はすべて大切に保存されたといわれているが、伝研移管前後の鷗外日記にみても、九月二十八日、十月十日、十月十五日付の記事に相応する賀古宛書簡はなぜか発表されていない。同様の事例は他にもある（「鷗外」、第二号、二七頁、森鷗外記念会、昭和四十一年）。単なる散逸かどうか不明である。

(21) 長谷川泉、「森鷗外」、四九頁、明治書院、昭和四十年より引用。

(22) 「唐木順三全集」、第二巻、二五五頁、筑摩書房、昭和四十二年より引用。

(23) 森於菟、「森鷗外」、二七四頁、養徳社、昭和二十一年。なお衛生学について鷗外は於菟に、「己は陸軍に入る時に将来予防疫学の必要を思つて衛生学を選んだ。然し為事してみると衛生学は純正な独立した科学でない。少しく委しく入らうとすると忽ち化学、細菌学、病理学の範囲に及ぶ。お前は基礎医学の中でも外のものをするがよからう。」と語つた（同書、二八一頁）。

(24) 「鷗外全集著作篇」、第三十三巻、一一〇頁、岩波書店、昭和二十八年。

(25) 小林勇、「蝸牛庵訪問記」、七三頁、岩波書店、昭和三十一年。

(26) 唐木順三、「森鷗外の人と作品」、二八八頁、学習研究社、昭和三十九年。

(27) 河村敬吉、「森鷗外性欲雜説一」、四〇三―四頁、日本医事新報出版部、昭和二十四年。

(28) ドイツ留学中のノートに、「欧洲医学ヲ受売ト買出シハ可嫌也。」とし、「研究ノ成果ヲ教ルノ期ハ去レリ。研究ヲ教ユベシ。」

と記した鷗外は、ペッテンコオフェルの壮大な理論構成に長ずる包括的、哲学的頭脳よりも、コッホの着実な材料蒐集にもとづく冷静確実な真理把握の態度を高く評価して、「日本における医学の発展のためには、能う限り多くのコッホのあることが望ましい——ペッテンコオフェルの如き人は必ずしもなくてはならぬとは思われない。」と述べている(生松敬三、「森鷗外」、五一—三頁、東京大学出版会、昭和三十三年)。帰国後の鷗外にはこの評価が逆転したと見られる一面のあることは注目される。

(29) 山田弘倫、「軍医としての鷗外先生」、一七三頁、医海時報社、昭和九年

(30) 緒方博士は最初からあまり進まないやうである、それも其の筈、文部省で研究所を分捕ふなどと云ふことは博士にはまるで寝耳に水であつたらふ。博士は、学門上に於ては北里博士と其の根底の因源を異にしてゐるし、又た多少北里博士に含むところあるも事實である、私行上に於ては、北里を同郷の後進として引き立てたので、北里も毎に緒方先生と尊称して、在職廿五年祝賀の時には、たしか門人総代として祝辞を述べられたと記憶してゐる。それくらゐだから、学問上に於てこそ相争ふが、あんな事をして、北里に一ト泡吹かせてやらふなどとは恐らく考へて居られなみであらふ。左れば、誰がしたのか知らないが、北里の研究所に対してあんな事をしたに就て却て不快の念こそ懐いて居れ決して愉快は感じなかつたのであらふ。さう云ふ関係であるから、北里を追放したアト釜に据つて温くくしてゐるなどと云ふ事は、あの刻命な緒方博士には出来なからふ(日本医事週報大正三年十二月五日)。

(31) 「日本医事新報」、昭和三十三年十一月一日、第一八〇一号、二二頁。

(32) これはまた、緒方が明治二十二年、「炭疽熱に天然免疫ある動物の血清を以て炭疽に感受性を有する動物に注射せば該病を予防し且つ治療し得るの実験」を發表し、これを独訳しドイツ誌に掲載せんがため、原稿を在独中の北里に送附したところ、北里がこの原稿を握り潰し未發表に終つた(緒方規雄、「北里柴三郎略伝」、医学史研究、第一巻、二一〇頁、昭和三十七年)というような事情も介在していたのかもしれない。

(33) 「学東西を兼ね、識古今を貫いた鷗外も、おのれの所屬する階級の倫理を超えること能はざりし……鷗外の限界は要するに彼の思想を規定する階級道德の限界に外ならなかつたのである。……それは時代のせいだけでなく、彼の立場から来るものであつた。そしてその立場は、近代精神の本脈とは頗る遠いものであつたことを考へねばならないのである」(家永三郎、「日本近代思想史研究」、三〇九—三一一頁、東京大学出版、昭和二十八年)。「長与専吉、後藤新平、長谷川泰などの医療問題せんにたいする、いくばくかの開明的、在野的姿勢は、はじめて正規の外国教育をうけた東大卒業者によつて、否定されようとする。……現在の日本の医学界に巣くつている権威主義事大主義の形成にはたした鷗外の役割は相当のものようである。」(川上武、「日本医療の課題」、三二—三五頁、頸草書房、昭和四十二年)。

比良野貞彦と解剖図譜

弘前大学医学部麻醉学教室 松 木 明 知

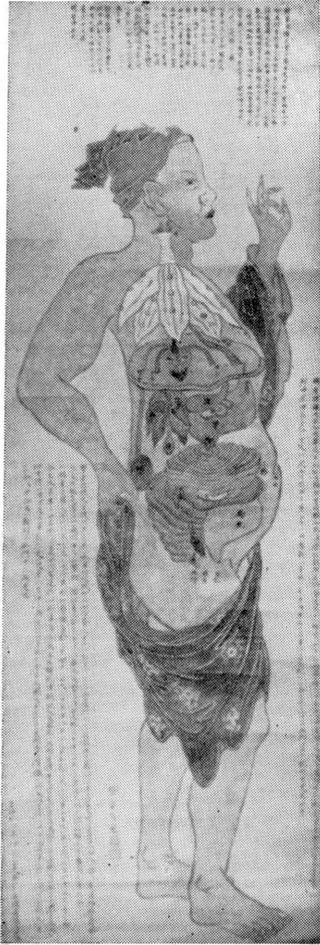
Sadahiko Hirano and his Anatomical Chart

Akiomo Matsuki, M. D.
Department of Anesthesiology
School of Medicine, Hiroasaki Univ.

1 緒言

筆者は弘前藩士比良野貞彦の模写するところの人体解剖

図譜を閲覧する機会を得たので、これを写真で紹介すると共に比良野貞彦についても述べてみたい。
なお本稿は津軽医史第二十九号に相当する。



2 解剖図譜について

この解剖図譜は現在、弘前市の竹内重夫氏が所蔵している。縦一二四・五センチ、横四一・二センチの大きさで軸として表装されている。右側面から人体として胸腹部の臓器を画いたものである。(写真I)

図譜は臓器別に色彩が施しており、主な臓器について記すと、心心赤、隔膜隔膜赤、脾脾黄、肝肝緑、脂膜脂膜桃、腎腎灰、大腸大腸灰、小腸小腸赤で衣は藍である。

図の上方と左右に各臓器についての解説文が記載してある。左に全文を掲げる。

肺者相傳之官治節出焉其形六葉兩耳四垂如蓋附着於脊之第椎中有二十四空行列分布諸臟清濁之氣為五藏華蓋也重三斤三兩屬乾金主藏魄其管有九節懸藏而在上管中有二道即咽與喉也滑伯咽所以嚙物者居喉之前至胃長一尺六寸為胃系又名胃脘也喉乃呼吸之門通于心以歸千藏

心者君主之官神明出焉其形如末開蓮花居肺下隔上附着於脊之第五椎重十二兩中有七孔三毛盛精汁三合屬離火主藏

神中出三系前脾系後為肝系腎系心在中而其位端正矣有胎膜外裹者心之包絡也心下橫膜附於脊之第七椎者謂之隔膜所以遮隔濁氣不使上熏於心肺之分也至是為上熏

肝者將軍之官謀慮出焉其為藏如木葉左三右四着於脊之第九椎重二斤四兩屬巽木主藏膽者中正之

脾者諫議之官知用出焉其形如刀鎌與胃同膜而能消磨水穀附着於脊之第十一椎重二斤三兩扁廣三寸長五寸中有散膏半斤屬坤土主藏意胃者倉廩官五味出焉

紆曲屈伸二尺六寸大一尺五寸重二斤一兩盛穀二斗水一斗五舛其上口名噴門当上脘下口即小腸上口名幽門当下脘也至是為中焦

腎者作強之官伎巧出焉其藏有兩枚狀如石卵附脊之第十四椎重一斤二兩屬坎水主藏精與志難經云其左者為腎右者為命門命門者諸神精之所舍原氣所繫也男子以藏精女子以繫胞膀胱者州都之官津液藏焉為腎之府居大腸之前有下口無上口其重九兩二銖縱橫九寸盛溺九升九合小腸者受盛之官

化物出焉為心之府其形如疊繩當臍上左廻十六曲大二寸半
 經八分之少半長三丈二尺重二斤十四兩受穀二斗四升水
 六升三合合之大半其下口名闌門當水分穴至是而泌別清濁
 水液滲入膀胱滓穢流入大腸也大腸者伝道之官變化出焉為
 肺之府當臍廻曲同乎小腸矣其大四寸經一寸寸之少半長二
 丈一尺重二斤十二兩受穀一斗水七升半大腸之末節各直腸
 及出滓穢之路大八寸經二寸寸之大半長二尺八寸受穀九升
 三合八分合之一難經云肛門十二兩是也

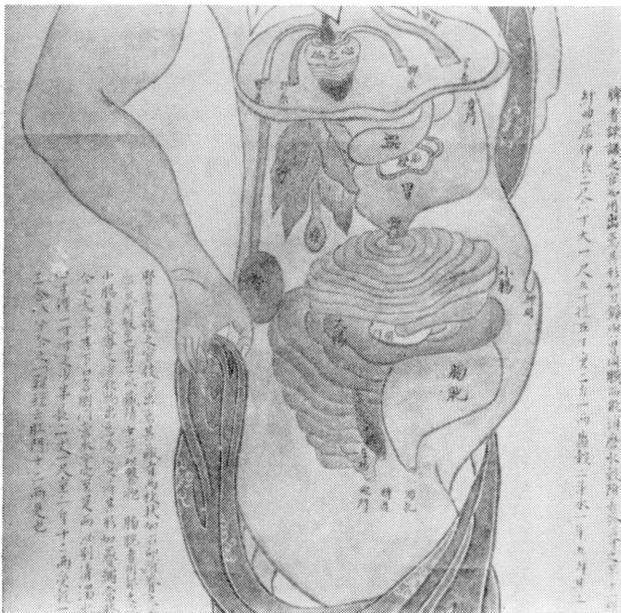
享保十四年仲冬之吉養素庵服肅敬之甫識

最後に「享保十四年仲冬之吉養庵服肅敬之甫識」とある
 のを見れば、享保十四年（一七二九）に記載されたものと
 思われ、これより少し以前に図譜が模写されたことが考え
 られる。

図の左下部に「塾貞彦写」とあり比良野貞彦のことであ
 る。

図説に「難經云」とあるところからすれば「難經」など
 から引用したものであることが知られるが養素庵服肅敬之
 については全く知る所がない。

図譜および図説共にこれまで発表されたものと大差が認
 められない。しかしこの中で注目すべきことは脾の下、胃
 の中に「脂腹」なる臓器が画かれていることである。（写
 真Ⅱ）。しかし、これについては説明はなにもない。



「脂腹」については⁽¹⁾「華佗内照図」、「類経図翼」などに
 為全く同じ部位に記されているが、いわゆる五臓六腑の中

にも入っておらずこれまで全く言及されていない。

筆者はその画がかれている位置と「脂膜」という字から、これが現在われわれのいう「臍臓」ではないかと推定するが、詳細は後日を期したい。

3 渋江抽斎と比良野貞彦

弘前藩の江戸定府医官である渋江抽斎を記した史伝⁽²⁾「渋江抽斎」は数多い森鷗外の著作の中でも傑作の一つに数えられている。

鷗外は抽斎を叙するに当って、単に抽斎のみならず広く遠戚にまで及んでこの事蹟を記した。

抽斎は生涯に四人の妻を娶った。尾嶋、比良野、岡西および山内の四氏である。

比良野氏威能の祖父はこの凶譜を模写した貞彦である。

鷗外は、貞彦について、渋江抽斎(その二十六)の中で「比良野氏は武士気質の家であった。文蔵の父、威能の祖父であった助太郎貞彦は文事と武備と併せ有した豪傑の士である。外浜又嶺雪と号し、安永五年に江戸藩邸の教授に挙げられた。画を善くして、外浜画巻及善知鳥画軸がある。剣術は群を抜いていた。壮年の頃村正作の刀を佩びて本所割

下水から大川端辺までの間を彷徨して辻斬した。千人斬ろうと思ひ立ったのだそうである。抽斎は此事を聞くに及んで歎息して已まなかった。そして自分は医薬を以って千人を救はうと云ふ小願を發した」と記している。

「津輕藩日記伝類」にも左に示すように画人の部に貞彦の名が見え、谷文晁、伊勢貞丈と親交があったと伝えてい

る。

比良野助太郎貞彦(初房之助)江戸定府之士なり。寧親公

(弘前藩第九代藩主一筆者)御代 江戸御留主居となる。

劍術に熟練し安永五年より江戸藩邸の教授せり。貞彦画を善くし、号外浜人、嶺雪一年公の駕に従て津輕に下る。

数旬間暇を乞て、山野河海を跋涉して、其見る所を凶して、一卷とし外浜画巻と云。山崎道沖、伴建尹、沢元愷の序跋あり、又善知鳥を数羽模して、一軸とし、夫に雑話を添えて一冊を著ハしたり。記中橋嘉樹(大塚市郎右衛門、字敏郷号蒼梧亭)伊勢貞丈等の門答を載せたり、又江戸より津輕までの道中記に山川、地理以下の図及び記を載せて一冊とせり、貞彦常々谷文晁、伊勢貞丈等に交り、名江湖の間に顕はるゝと云。

比良野貞彦、御国へ下りし時、画人毛内雲林、松宮保一等、貞彦に従ひ唐画を穿鑿し、是津軽にて唐画の権興なりと云。

比良野貞彦、信明公（弘前藩第八代藩主―筆者）の御近習を勤めしか天明八年八月十五日、公御近習を御供にて、西の郭へ被_レ為_レ入月見可_レ被_レ遊として、御側一統思ひくく吟詠いたし処、甚御機嫌にて助太郎貞彦も致せよとの御事なるに、強て御辞退申し上しに、御側よりも相進め候処、貞彦左様ならハ恐入可_レ奉申上とて

御家中は雨漏る家に月見かな

公御聞被_レ遊助太郎ハよしに致すへしの御詞にて、御婦被_レ遊けるとなり（比頃凶荒の余にて、御家中難澁を極めけるなり）

津軽地方を頻回に襲った飢饉の中でも天明の飢饉は殊に非惨を極め、餓死や病死した者は八万余人に及び、これは領内の人口の三分の一に当るといふ。右の一句は彼の豪放で且つ細心な性格をよく示すものといえよう。

貞彦は単に武芸に秀い出た藩士であつたばかりでなく、「貞丈雜記」「安齋隨筆」の著者として知られる伊勢貞丈や南画、大和絵に加えて洋画の技法も能くした谷文晁と親

交があつたことは注目に価する。

とくに絵画については谷文晁の影響が少くなかつたものと思われ、その手法が貞彦によって津軽地方へ伝えられたのであつた。

彼には右に述べた著述のほかに「奥民図彙」がある。本書は菅江真澄の遊覧記とともに津軽の民俗志の二大雙壁で、寛政年間彼が藩主に従つて弘前に滞在中、その見聞したことを多数の挿画とともに記したものである。

4 比良野貞彦とその世代

比良野氏はもともと近江の出身で、初代の勘助は延宝五年（一六七七）十一月に「勘定之者」として四代藩主津軽信政に召し抱えられた。

信政の時代には各分野の指導者が多数各地より招聘されたが、比良野勘助もこの中の一人であり、「解体新書」の訳述に参加した桐山正哲の祖、初代桐山正哲や渋江抽斎の祖渋江道陸もこの期に招聘された。

以後代々比良野家は定府の藩士として仕えたが、五代の比良野房之助が本稿で論じている貞彦である。

弘前藩の定府藩士の由緒書を集成した「御家中明細書」⁽⁷⁾

から比良野氏の項を左に抄出しておく。寛保元年十一月二十六日 病死

初代 比良野勘助 御国近江

延宝五年十一月三日 勘定之者

元禄二年十二月二十三日 勘定小頭

元禄四年九月一日 御蔵奉行

宝永六年七月二日 病死

二代 比良野小三次 勘介倅

元禄十年五月九日 御目見

宝永六年九月十六日 跡式

宝永七年十二月二十八日 若殿様御小姓組

宝永八年六月十三日 近習小姓

享保六年十二月二十六日 御部屋様御中小姓支配方

元文三年七月一日 病死

三代 比良野助三郎 勘助養子 実山川源吾弟

享保二十一年四月十五日 養子

元文三年三月六日 御小姓組

元文三年十二月二十六日 跡式

四代 比良野小三次 助三郎末期養子 実勘助養子

後出生男子

寛保二年二月九日 助三郎跡式 御留守居組

宝曆四年九月二十二日 病身助三郎実子房之助家督

相続

五代 比良野房之助 後改介三郎、助太郎 実助太郎

実子

宝曆四年九月二十二日 家名相続

宝曆四年十二月十五日 御目見

宝曆五年二月晦日 月並出仕

宝曆六年三月九日 御馬廻

明和七年二月二十九日 助三郎と改名

天明四年一月十一日 御徒頭

寛政三年七月九日 助太郎と改名

寛政四年一月十一日 御小姓組頭

寛政十年五月三日 病死

六代 比良野文藏 助太郎末期簪養子 実大屋但馬守

様御家来波多野平内四男

寛政十年七月二十八日 跡式

寛政十一年六月一日 御目見二十歳

寛政十一年六月十五日 月並出仕

文化三年四月二十三日 御目付

文化十一年十二月十一日 御徒頭

文化十三年十月二十六日 御中小姓頭格

文政十三年十月一日 御取次格

天保四年正月十一日 江戸足輕頭

天保十四年正月十一日 大寄合格

嘉永三年四月二十四日 病死

七代 比良野助太郎 文藏悖

文政四年四月一日 御目見

文政十二年六月十七日 御広間詰番御雇

文政十三年十一月二十日 御手廻組

天保七年四月十一日 御使番

天保八年七月二十六日 不調法之儀—減俸

天保十年六月二十日 御手廻組

天保十三年五月十五日 御使番

弘化五年三月十五日 御徒頭格 御留守居介

嘉永三年二月一日 御留守居

嘉永三年七月一日 跡式

嘉永三年十二月二十八日 奥通

安政三年正月十一日 物頭格

安政五年七月二十日 諸手足輕頭格

5 結語

本稿では弘前藩の江戸定府藩士比良野貞彦が模写した人体解剖図譜についてこれを紹介し、併せて比良野貞彦とその世代について言及した。

註

① 渡辺幸三 現存する中国近世までの五臟六腑図の概説 日

本医史学雑誌 第七卷第一—三号、昭和三十一年九月

② 森鷗外 渋江抽斎（岩波文庫）岩波書店 昭和十五年八月

③ みちのく双書第五集 青森県文化財保護協会、昭和三十三年六月

④ 弘前史編纂委員会 弘前市史（藩政編） 弘前市、昭和三十三年十月

⑤ 松木明 津軽方言書誌（津軽語彙第六編） 昭和三十三年十月

- ⑥ 松木明知「蘭東事始」覚え書(其一)——桐山正哲永世を中心として 蘭学資料研究報告第一七三、一七六、一八〇号。一九六五年九月、十二月、一九六六年四月
- ⑦ 弘前市立図書館蔵。慶応三年。
- ⑧ 森鷗外の「渋江抽斎」(その三十九)に「五百の仮親比良野文蔵の歿したのも、同じ年(嘉永三年筆者注)の四月二十二日である」と記されているが「御家中明細書」の記載が正しいと思われる
- ⑨ 森潤三郎の校勘記によれば歿したのは明治九年(一八七七)十月二十一日である

Summary

An old anatomical figure of the human body was introduced in this paper.

The coloured figure, 124.5 by 41.2 centimeters in size, was copied by Sadahiko Hirano about 1729 (14th year of Kyoho), and brief explanations about such organs as heart, lungs, stomach, intestines and kidney were described on it.

This chart was not made as the result of practical human dissection, but on the basis of the traditional Chinese medicine which was far from the fact in many points.

Hirano (?~1798) was a clansman of the Hirotsaki

feudal clan, and was a master swordsman, but a noted painter as well.

It is, however, regretted that we have no information about the original figure yet.

わが国近世の手紙の読み方

羽 倉 敬 尚

How to Read Japanese Letters of the Early Modern Time

Keisho Hakura

歴史の研究上、その歴史をつくる人物の正しい伝記を知る事は緊喫事でなければならぬ。そしてこれはその人の著書や言論が資料となるのである。

先賢学者には等身の著述を残しておるものもあるが少いのもあり、学者以外のもの即ち遺著のない者は消息即ち手紙の断簡でも、その筆者の言論意志延いてはその性格を知る重要資料となる。この手紙の書字は勿論昔の書体、即ちクズシ字であつて、鉛筆やペンが汎用され用筆が少くなつた今日から見れば、実に隔世の感があつて、時には外国文以上に読解が難義視されるのである。実に困つたことで、近々百年、ワレラの父、祖父の時代の遺書手紙の類が何が書いてあるかわからぬと捨てられてしまふ実情である。

これらの読解については学園に於て古文書学科があるが、短時間の講義では、全くの糸口であり、實際は糸口を把む事も至難で、要するにこれは学問でなく、広く見ることにその多年の注意経験の集積に俟つ外ないのである。

今、学者、僧侶、公卿武人といった医学史研究上必要かと思はれる各層人についてその手紙の現物を提示しその一端を説明する。先づ近頃、大阪で顕彰された医学兼天文学者豊後国（現大分県）人麻田剛立書状全文を文末にあげる。これは東大史料編纂所の複写写真の引用である。剛立が七曜曆の製版及び製本を山本彦九郎に注文しその代金を高橋、三宅、

山片、及び自分共四人にて負担しようとして大防城代の下、定番（譜代の小藩）の下僚同心の高橋に云ひ送れる状、高橋は門弟で卅一才年少であるが役職ゆえ文丁重である。天明年間のもの。更にこの文を通読すると、その行文を通じ筆致頗る懇切周到であることよって筆者剛立の几丁面な性格が遺憾なく表れてをり、この緻密さが彼れの学問研究に一貫した態度であり、碑文等で窺はれる彼の曆学医学両部門の客観的記述の苦辛探究の史実が裏書き実証されるかの様である。

実は剛立も著録は今日伝うるもの少ない。天文曆学では幸いに門人山片蟠桃、あて名の高橋東岡、間長涯等の俊才に依って伝わるが、医学に於ては近年、大阪懷徳堂碩儒中井履軒、同郷の同学三浦梅園の著書に依て紹介された。履軒は「越俎弄筆」——近年、東京の日本医歯薬出版K・Kにて翻刻出版——で剛立の人体解臓の卓見を紹介した。履軒は今まで動もすれば固陋、書籠に籠居して經書の訓コ研究に没頭した頑儒の様に見られておった（西村天囚の「懷徳堂考」等）がこの著には序文は漢文で解剖の説明は片カナ書下シ文で文字もクズサズ現代の誰れにでも読み易く書いておる、後世を洞察しておるかの如く、その用意の程が感嘆せられる。そしてこれに依って履軒の学が淵博で近代科学をも理解し、特に医学に関心が深かったといふ達識の程が窺はれる。

書字の話にうつるが、履軒の書は懷徳堂の能筆第一人者の先輩三宅万年（学堂初代学主、医家でないが「医事傍観」の著あり）の墨を磨するもので純日本式独特のクズシ方、篆書草行にも長じ頗る氣品がある。和文の著もあり和歌にも秀詠ありその点、兄の碩儒竹山以上の博識というも過言でない。

消息手紙について、他に学者の荷田東丸、公卿の能筆近衛信尹、僧侶の東本願寺宣如法主（石川丈山あて）、武人黒田如水（孝高）のものを現物についてその読解を説明した、将来若し参考の端緒ともならば幸甚である。

日本医史学会例会記事

十一月例会 十一月二十五日

於慶応大学北里図書館会議室

一、明治十一年の東京大学の図書目録について 酒井 シヅ氏

この目録は、今度出版された東京大学医学部百年史の中に採録されているものである。

ここに記載されている書名と部数から、その頃の東京大学医学部に所蔵されていた本の種類と部数を分類、整理して、同時に、順天堂大学図書館の山崎文庫にある東京大学医学部第五年報と東京大学医学部一覽―明治十年―を合せて検討してその頃の医学教育の一端を窺った。

要するに、明治十一年はドイツ医学が採用されてから既に七年を経た結果、蔵書中、ドイツ書が圧倒的に多い。又、予備教育が合わせて行なわれていたため、医学専門書以外のものが全体の部数の約七八割も占めている。

ドイツ書に次いで英書が多かったが、これはドイツ医学採用以前に英書による医学教育が進められていたことを示している。等の所見を述べた。

三、ジェームス・パーキンソン

小川 鼎三氏

パーキンソン (James Parkinson, 1758—1824) の生涯と業績の概要を左記の文献に基づいて述べた。一七八四年から彼の名がロンドンの外科医組合の名簿にでている。その翌年にはジョン・ハンターの外科講義をきいた。その聴講ノート(速記による)が

後に彼の息子で医業の後継者 John William Keys Parkinson により公表された。ジェームス・パーキンソンは一七九〇年代に英国内の社会改革のために Old Hubert という変名で激しい文筆活動をした。そのために捕えられたことはないが、獄中の同志やその家族の世話を熱心にやったようである。その後、啓蒙的な医書あるいは衛生書を次々にだした。

ヘルニヤ帯の改良(一八〇二)、痛風の本態と治療(一八〇五)を著わしている。化学便覧(一七九九)、化石の研究(一八〇四—一八一)も彼の著書であり、その博識は驚くほどである。さらに化石の本 *Outlines of Oryctology* が一八二二年に出版された。これは後に三版まで版を重ねた。精神病者の取扱いの問題でひどく困ったこともあった。

彼の名を不朽にした *Shaking Palsy* の論文は一八一七年、六二才のときである。虫垂炎が死の原因になることを一八一二年に発表した。これは息子のジョンとの共著というべきものらしい。彼はまた熱心なキリスト教の信者であった。肖像は残っていない。時として同名別人(歯科医で彼より後の人)のがそれとされているから注意を要する。

参考文献

- 1) L. G. Rowntree: James Parkinson. *Bulletin of the Johns Hopkins Hospital*. Vol. 23, 1912. pp. 33-45.
- 2) Erich Ebstein: James Parkinson's Essay on the shaking palsy. *Eine bibliographische Notiz*. *Neurologisches Centralblatt*. 31. Jahrg. 1912. S. 222-224.

3) Fielding H. Garrison : An Introduction to the History of Medicine. 3. ed., Philadelphia-London. 1921. (pp. 444-445)

4) Alfred J. Osthimer : An Essay on the Shaking Palsy by James Parkinson, M. D. : Member of the Royal College of Surgeons, with a bibliographic note thereon. Archives of Neurology and Psychiatry. Vol. 7, 1922. pp. 689-710.

5) Bibliographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte. Bd. 4, 1932) (Nachdruck 1962). (S. 509-510)

6) Macdonald Critchley, William H. McMenemy, Francis M. R. Walsh, and J. Godwin Greenfield : James Parkinson (1755-1824). London, 1955. pp. 1-268.

7) 橋本博太郎 : Janner Parkinson (1755-1824). 神經研究の進歩, 第3巻, 第4号, 昭和34年 (1959). pp. 1-3.

三パーキンソン病の原書より

豊倉 康夫氏

James Parkinson (1755-1824) がパーキンソン病に関する論文 (An Essay on the Shaking Palsy. Sherwood, Neely & Jones Co., 1817) を発表してから本年 (1967) は丁度一五〇年目に当る。この原本は既に一九世紀末頃から非常に入手困難な珍本であるが、Ebstein (1912) 及び Osthimer (1922) のしらべた所によれば、英国の三冊 (ロンドン) の Royal College of Surgeons 図書館、ロンドン市の Royal College of Physicians 図書館、マンチェスターの Manchester Medical Society 図書館) と米国

の三冊 (ロンドンの Surgeon-General 図書館、シカゴの Dr. S. Kuh の個人蔵書) の計五冊の原本の所在が確認されたのみである。演者は Arch. Neurol. & Psychiat., 7 : 681, 1922. に再録されている原著に據った。

論文は五章に分れ、第一章では疾患の定義、自然史につづいて六例の症例呈示がある。第二章では疾患特有の症候として不随意の振戦 (tremor coactus) と小走りの歩行異常 (Scelotyrbe festinans) につづいて詳述して居る。以下、鑑別診断 (第三章)、病因 (第四章)、治療法に関する考察 (第五章) と続く。論文全体を通じて自然史と疾患特有の症候に関する記述が白眉であり、この慢性進行性の疾患を一つの新しい疾患単位として確立するに至った彼の方法論は後世の模範となった。

彼の記載の中で筋固縮 (rigidity)、無表情な顔貌、調節幅異常について言及はないが、本症における基本的な臨床症候については殆ど完璧に近い。以下に挙げる症候論はすべて彼の記載している所である。(1) 多くは五〇才以上の老年に発病、(2) 徐々に発症、経過は慢性進行性、(3) 静止時の振戦であり、企図運動で軽減する、(4) 最初半側に起り、後に他側にも及ぶ (5) 体の前屈姿勢 (6) 小刻みの小走り歩行、早口の言語、(7) 運動の振幅が小さい、(8) 前方突進症状と転倒し易い傾向、(9) 唾液がたまり易いこと、(10) 便秘 (11) 脳卒中による振戦の停止と麻痺回復後の振戦再現 (12) 知能障害、知覚障害を欠くこと。

十二月例会 (蘭学資料研究会合同主催)

十二月十六日

一、京都の蘭学について

——研究の回顧と展望——

山本 四郎氏

はじめに研究の回顧を小石元俊（京都小石家）・三伯系の藤林普山（京都田辺郷土史）・小森玄良（京都小森・大垣大橋両家、史料散逸の状況）・辻蘭室（京大・横浜辻家）・新宮涼庭（京大）について述べ、蘭学者の地位を小石〓京都古医方と江戸蘭学の交点・藤林と小森〓反訳と治療による発展・辻〓各国語と諸学科にわたる広般（ただし初歩的のもの多し）な関心・新宮〓技術と教育および経済活動、という観点から説明、その時代的背景にふれる。未着手は小石元瑞、史料的に京都における活躍の発掘不足ないし不詳のものとして三伯・日野鼎哉・広瀬元恭などは今後の研究にまたねばならない。

最後に、京都のみでなく、全国的は、蘭学史、医学史の研究とともに、時代のなかに従来の研究成果をいかに位置づけ、文化の形態・交流の状況を描き、問題点を見出すか、つまり、伝記的、書誌学的研究を基礎とし、それをふみこえた包括的な研究（一部着手されつつある）をする必要を説く。

付〓演者の研究成果は『藤林普山先生』・『小石元俊』・『新宮涼庭伝』（近刊）・『小森玄良伝研究』・『辻蘭室』（近刊の論文集所収）参照。

二 和蘭医話の版本について
近く本誌に原著発表予定。

石原 明氏

三、近世日本の手紙の読み方
本文参照。

羽倉 敬尚氏

国際医史学会のお知らせ

一九六八年度国際医史学会

会長 パッチニ教授 (Prof. Pazzini)

開催地 イタリアー国シエナ市 (Siena)

期日 一九六八年九月二一―二十八日

主 題

一、トスカナ医学の中世医学への貢献

二、中世における医学と芸術

三、歴史におけるイタリアーと他国家との間の医学上の関連

四、医学革命、特に過去百年間における病理学、病理学的

機転及び特異性の概念について

五、歯科技術の革新

六、その他

使用国語 英、独、仏、伊、スペイン、ポルトガルの各語

一九七〇年度国際医史学会

会長 ボロガ教授 (Prof. Bologna)

開催地 ルーマニヤ国ブカレスト市 (Bucarest)

期日 未定（一九七〇年九月の予定）

主 題

一、医学的義務論の歴史

二、ローマ帝国諸領域の医学

三、民間医学の科学的意義

四、歴史におけるローマニヤと他国家との間の医学上の関連

五、その他

使用国語 英、独、仏、伊、露、ルーマニヤの各語

「日本医史学雑誌」投稿規定

投稿資格 原則として本会会員に限ります。

原稿形式 日本文の表題、著者名のつぎに、英文表題ローマ字著者名を記し本文の終りに Summary と書いて英文抄録を添えて下さい。

原稿枚数 表題、著者名、本文、表、図版等をあわせて三印刷ページ（四百字詰原稿用紙で大体七枚）までは無料で掲載、それを越えた分は一印刷ページ当り一五〇〇円の実費を頂きます。

校正 原著については初校の著者校正をお願いします。その他の場合はなるべく編集部におまかせ下さい。

別刷 投稿者には論文掲載誌を五部無料贈呈します。特に別刷希望の方には実費を頂いて五十部単位で作成致します。この場合には表紙に表題、著者名などを印刷します。

原稿送り先 原稿送り先東京都文京区本郷二丁目一ノ一

順天堂大学医学部医史学教授室内 日本医史学会

「論文抄読」欄へのお願ひ

往年の中外医事新報には、内外の秀れた文献が抄録の形で載せられ、会員の便に供せられていたことは皆様御承知の通りであります。今回再びこの欄を復活することとし、早速御覧のような第一号を小川先生から頂くことができました。

次号より漸時本欄の拡充に努めたいと思っておりますので、会員の皆様からの御投稿をお願い申し上げます。

さしあたって、論文一篇につき四〇〇—八〇〇字の抄録とし、日本医史学会までお送りください。

* * *

In Japan this drug came in use against syphilis by the end of the 16th century, although it is not exactly known when and by whom the indication of this drug was first systematically described.

This drug was reintroduced into Japan in the 17th century by such European physicians as Allmans Katz, Dannel Busch, Steven and Willem ten Rhyne.

Among many Japanese authors, who have written on syphilis and its treatment in the Tokugawa period 徳川時代 (1603—1867), the works of the following two persons have specially interested the present author.

Shutoku Kagawa 香川修徳 (1683—1755) described the diagnosis and prognosis of syphilis in detail in his publication “Ippondo Gyoyoigen” 一本堂行余医言 and the usage of Tu Fu Ling 土茯苓 in “Ippondo Yakusen” 一本堂薬選.

Dokushoan Nagatomi 永富独嘯庵 (1732—1766) published a book “Baiso Kuketsu” 徽瘡口訣 and gave the general description of syphilis, explaining how to use Tu Fu Ling 土茯苓.

Wien für die freundliche Lieferung einer Photokopie der zitierten Abhandlung von Andreas Vesalius ebenfalls herzlichst gedankt !

Anschr. d. Verf. : Dr. Yasuo Otsuka

13, Saneicho, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan

Summary

Tu Fu Ling 土茯苓 (China root), a Chinese drug, was first reported in "Ben Cao Gang Mu" 本草綱目 of Li Shi Zhen 李時珍. This plant had been mistakenly spoken under the names of two different plants, Bi Xie 萆薢 and Ba Qi 菝葜. The identification of these three plants on the basis of modern botanical taxonomy was made by a Japanese botanist, Tomitaro Makino 牧野富太郎, as follows : Tu Fu Ling 土茯苓 is *Smilax glabra* Roxb. ; Bi Xie 萆薢 *Smilax stenopetala* A. Grey or *Dioscorea tenuipes* Franch. et Sav. ; and Ba Qi 菝葜 *Smilax China* L.. At present, however, it is usually believed, that Bi Xie 萆薢 is not *Smilax stenopetala* A. Grey, but *Dioscorea tenuipes* Franch. et Sav..

Bi Xie 萆薢 and Ba Qi 菝葜 were reported in the earlier Chinese herbals, "Shen Nong Ben Cao Jing" 神農本草經 and "Ming Yi Bie Lu" 名醫別錄, respectively, and according to their descriptions Bi Xie 萆薢 was chiefly used for pains and stiffness of the back and loin; disorders of the joint; paralysis caused by coldness and wetness ; hardly curable malignant ulcers; and the heated pneumonia; and Ba Qi 菝葜 for pains of the back and loin caused by coldness, paralysis caused by the wind, disfunctions of the blood, and the excessive urinary excretion.

After the invasion of syphilis from America into Europe and Asia, Tu Fu Ling 土茯苓 became known as a useful medicine against syphilis all over the world.

The first epidemic of syphilis in Europe broke out in 1493 and that in China before 1505 and in Japan in 1512. The first application of this drug as an antisiphilitic was attributed to the Chinese before 1521, and this experience was introduced into Europe about 1533 via India.

The first description of this drug as an antisiphilitic was given in China by Wang Ji 汪機 in his publication "Shi Shan Yi An" 石山醫按, and in Europe by Andreas Vesalius in his "Letter on China root".

Toyo Yamawaki 山脇東洋

Tu Fu Ling 土茯苓 5 Sen 錢, Chuan Qiong 川芎 (Cnidii rhizoma) 5 Bu 分, Da Huang 大黃 (Rhei rhizoma) 5 Bu 分, Jing Jie 荆芥 (Nepetae herba) 6 Bu 分, Ji Cai 戟菜 (Houttuyniae herba) 6 Bu 分 und Jin Yin Hua 金銀花 (Lonicerae flos) 1 Sen 錢. (Sen 錢 und Bu 分 sind Gewichtseinheiten.)

Man koche die gegebenen Arzneien in 2 Teetassen Wasser, bis die Hälfte davon ausgekocht ist.

6. Schlusswort

Tu Fu Ling 土茯苓 ist eine der wenigen Drogen, die im medizinischen Verkehr zwischen Westen und Osten eine grosse Rolle gespielt haben. Als ein unwillkommenes Nebenprodukt der grossartigen Leistung von Columbus wurde Syphilis, die ursprünglich eine endemische Krankheit gewesen war, am Ende des 15. Jahrhunderts in Europa und unmittelbar darauf in Südostsowie Ostasien eingeführt.

Tu Fu Ling 土茯苓 galt früher als eine gewöhnliche Droge in Ostasien, und fand bei der Behandlung von Gelenkschmerzen, Blattern und durch Kälte und Feuchtigkeit verursachten Krankheiten Verwendung. Nachdem erst in China bekannt wurde, dass dieses Mittel gegen Syphilis wirksam ist, wurde es gleich in Europa eingeführt, und der damals mächtigste Kaiser in Europa, Karl V., verwendete diese fremde Droge bei der Behandlung seiner Gicht mit Erfolg. Seitdem wurde sie in Europa eine Zeitlang hoch angesehen. Infolgedessen wurde diese Droge von mehreren Ärzten, die im 17. Jahrhundert nach Japan kamen, hier wiedereingeführt.

Unter vielen japanischen Autoren, die in der Periode Tokugawa 徳川時代 (1603—1867) über Syphilis und deren Behandlung geschrieben haben, wurden hier zwei Autoren, Shutoku Kagawa 香川修徳 und Dokushoan Nagatomi 永富独嘯庵, genannt und ihre Meinungen wurden dargestellt.

Der Autor fühlt sich verpflichtet seinem Lehrer Herrn Prof. Dr. Teizo Ogawa der Juntendo Universität für die wertvollen Ratschläge sowie die ständige Anregung zu dieser Arbeit seinen herzlichsten Dank auszusprechen.

Frau Dr. Cornelia Zielinski Kanokogi sei für die liebenswürdige Korrektur des deutschen Textes und Frau Prof. Dr. Erna Lesky der Universität

rung der Diagnose und Prognose von Syphilis und in "Ippondo Yakusen" 一本堂藥選 beschreibt er die Anwendung von Tu Fu Ling 土茯苓.

Shutoku Kagawa 香川修徳 sagt: ((Tu Fu Ling 土茯苓 ist ein unentbehrliches Mittel gegen Syphilis. Auch wenn man dieses eine längere Zeit und in grosser Dosis nimmt, bringt es nur Gutes und schadet gar nicht. Allerlei durch Syphilis hervorgerufene Beschwerden werden dadurch beseitigt. Quecksilberpräparate wirken zwar auch, aber nur kurzfristig. Das Gift wird allmählich manifest, und mehrere Beschwerden treten nachträglich auf. Nur Tu Fu Ling 土茯苓 bewirkt die vollständige Beseitigung des Giftes, also soll man es bei allen Patienten anwenden, ob es sich um Erwachsene, Kinder, Männer oder Frauen, oder sogar solche, die die Krankheit geerbt haben, handelt. Er gibt auch ein paar mit Tu Fu Ling 土茯苓 erfolgreich behandelte Beispiele.

II. Dokushoan Nagatomi 永富独嘯庵 und sein Werk "Baiso Kuketsu" 徽瘡口訣

Dokushoan Nagatomi 永富独嘯庵 (1732—1766) gilt ebenfalls für einen grossen Arzt der Periode Tokugawa 徳川時代 (1603—1867).

In seinem Werk "Baiso Kuketsu" 徽瘡口訣 (eine wichtige Lehre über Syphilis) sagt Dokushoan Nagatomi 永富独嘯庵: ((Diese Krankheit (Syphilis) ist seit der frühesten Zeit oft laienhaft behandelt worden. Daher sind viele Patienten durch Quecksilbervergiftung in hoffnungslosen Zustand gekommen. ……Die meisten Patienten halten ihre Krankheit geheim und benutzen verschiedene Salben oder sie beeilen sich möglichst früh Tu Fu Ling 土茯苓 zu nehmen, um dadurch eine zeitweise Genesung zu erreichen. Aber das Gift arbeitet in den Patienten langsam weiter, sie leiden dann an Knochenschmerzen, Augen- und Ohrenbeschwerden. Die von Natur starken Patienten sollen zunächst Dang Gui 当歸 (Lingusti radix), Chuan Qiong 川芎 (Cnidii rhizoma), Da Huang 大黃 (Rhei rhizoma), Lian Qiao 連翹 (Forsythiae fructus) und Jin Yin Hua 金銀花 (Loniceræ flos) u. dgl. nehmen, wodurch das Gift langsam ausgeschieden wird. Und man verwende Tu Fu Ling 土茯苓 erst wenn die Krankheit nicht in ihrem Anfangsstadium ist.

Dokushoan Nagatomi 永富独嘯庵 gibt u. a. folgendes Rezept, das er von seinem Lehrer Toyo Yamawaki 山脇東洋 erfahren hat. Das ist:

Rp. Gomotsu Gedoku To 五物解毒湯 von meinem verehrten Lehrer

in der zweiten Hälfte desselben wurde aber diese Droge von Europäern wieder ins Morgenland und zwar hauptsächlich in Japan eingeführt. Nach der Beschreibung von "16 Seiki Nichi-O Kotsushi no Kenkyu" 十六世紀日欧交通史の研究 (Über den japanisch-europäischen Verkehr im 16. Jahrhundert) von Yoshitomo Okamoto 岡本良知 gibt eine spanische Mitteilung über Export nach Japan aus dem Hafen Makao Ende des 16. Jahrhunderts eine Liste der Exportartikel, unter denen auch Tu Fu Ling 土茯苓 zu finden ist.

Seit dem 17. Jahrhundert kamen viele Holländer und weniger zahlreiche andere Europäer nach Japan, und übten einen erheblichen Einfluss auf die japanische Medizin aus.

In "Zenseishitsu Iwa" 繕生室医話, einem von Kuninori Katsuragawa 桂川邦教 verfassten Werk, sind viele europäische Rezepte gegeben, die Tu Fu Ling 土茯苓 enthalten. Sie stammen von Allmans Katz (1661-1662 in Japan), Dannel Busch (1662-1665 in Japan), Steven (1672 in Japan), Willemten Rhyne (1674-1677 in Japan) u. a..

Engelbert Kaempfer, ein deutscher Arzt, der von 1690-1692 in Japan wohnte, gibt in seinem im Jahre 1712 veröffentlichten Werk "Amoenitatum exoticarum" eine ausführliche Erklärung von Tu Fu Ling 土茯苓 mit einer Abbildung, allerdings macht er hierbei einen kleinen Fehler, d. h., eine Verwechslung von Tu Fu Ling 土茯苓 mit einer anderen Pflanze Ba Qi 菝葜.

5. Zwei japanische Beiträge über Syphilis in der Periode Tokugawa 徳川時代

I. Shutoku Kagawa 香川修徳, seine Beiträge zur Untersuchung von Syphilis und deren Behandlung

Shutoku Kagawa 香川修徳 (1683-1755) ist ein bedeutender Arzt in der Periode Tokugawa 徳川時代 (1603-1867), und er machte eine genaue Untersuchung über Syphilis und deren Behandlung. Er veröffentlichte u. a. zwei grosse Werke: "Ippondo Gyoyoigen" 一本堂行余医言 (Medizinische Lehre von Ippondo 一本堂) und "Ippondo Yakusen" 一本堂薬選 (Arzneikunde von Ippondo 一本堂). Ippondo 一本堂 ist ein anderer Name von Shutoku Kagawa 香川修徳.

In "Ippondo Gyoyoigen" 一本堂行余医言 gibt es eine ausführliche Erklärung

Ling 土茯苓 erwähnen.

“Sanki Chokushiho” 三喜直指方 erschien 1785. Der Herausgeber Nanyo Hara 原南陽 behauptet, das Buch sei ursprünglich von Sanki Tashiro 田代三喜 (1465–1537) geschrieben. In diesem Buch findet sich die Beschreibung von Yobaiso 楊梅瘡 (die japanische Aussprache von Yang Mei Chuang 楊梅瘡) sowie ein Rezept namens Sofu Gedoku To 搜風解毒湯 (die japanische Aussprache des von Li Shi Zhen 李時珍 Sou Feng Jie Du Tang 搜風解毒湯 genannten Rezeptes), in dem Tu Fu Ling 土茯苓 die Hauptrolle spielt. Es ist aber durchaus unsicher, ob das wirklich von Sanki Tashiro 田代三喜 geschrieben wurde, und zwar aus folgendem Grund, nämlich: Die Erklärung des genannten Rezeptes in “Sanki Chokushiho” 三喜直指方 und diejenige in “Ben Cao Gang Mu” 本草綱目 sind, wie dies auch an vielen anderen Erklärungen in den beiden Werken bemerkbar ist, inhaltlich genau gleich. In dieser Hinsicht hat Genkan Taki 多紀元簡 (1732–1801) vollkommen Recht, indem er im Geleitwort zur Ausgabe von “Sanki Chokushiho” 三喜直指方 äussert; ((Das Buch “Sanki Chokushiho” 三喜直指方 entnahm sieben Zehntel seines Inhaltes aus “Ben Cao Gang Mu” 本草綱目, ……… Das Buch kann nicht als Originalwerk von Sanki Tashiro 田代三喜 bezeichnet werden.))“Guan Kuketsu” 愚按口訣 wurde von Doju Nagasawa 長沢道寿 (einem Schüler von Dosan Manase II. 二代目曲直瀬道三) ca. 1650 verfasst und wurde 1672 von Sanryu Nakayama 中山三柳 (einem Schüler von Doju Nagasawa 長沢道寿) revidiert, und dieser fügte dabei mehrere Sätze hinzu. Das oben genannte Rezept, Sofu Gedoku To 搜風解毒湯, findet sich nicht unter den Rezepten von Doju Nagasawa 長沢道寿 sondern unter denjenigen von Sanryu Nakayama 中山三柳 hinzugefügten. Das weist daraufhin, dass Tu Fu Ling 土茯苓 in Japan schon im 16. Jahrhundert gebraucht, jedoch erst im 17. Jahrhundert als das ideale Mittel gegen Syphilis anerkannt wurde.

4. Wiedereinführung von Tu Fu Ling 土茯苓 vom Abendland ins Morgenland

Seit dem 16. Jahrhundert wurde der Verkehr zwischen Westen und Osten von Tag zu Tag lebhafter. Tu Fu Ling 土茯苓 wurde wie gesagt in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts von China nach Europa gebracht,

Manase I. 初代曲直瀬道三 diese Krankheit mit dem Namen von Yobaiso 楊梅瘡 (die japanische Aussprache von Yang Mei Chuang 楊梅瘡) und gibt darüber Erklärungen, aber es sind darin keine Rezepte zu finden, die Tu Fu Ling 土茯苓 enthalten.

Ein anderes Werk von demselben Autor namens "Nichiyō Yakusei Nodoku" 日用薬性能毒 erwähnt nichts von Tu Fu Ling 土茯苓.

Dosan Manase II. 二代目曲直瀬道三, der Nachfolger von Dosan Manase I. 初代曲直瀬道三, hinterliess u. a. "Igaku Tenshoki" 医学天正記 und "Saiminki" 済民記. In diesen beiden Werken ist eine Beschreibung von Syphilis enthalten, aber keine über Tu Fu Ling 土茯苓.

Yu Fujikawa 富土川游 führte den folgenden Satz aus einer alten Handschrift "Suichikuo Domonsho" 翠竹翁答問書 (Gespräch mit Suichikuo 翠竹翁) an: ((Ein Mann namens Genkai Nyudo 源介入道 litt seit Februar des letzten Jahres an To So 唐瘡 (Syphilis) und hatte bereits 14-15 Kin 斤 (eine Gewichtseinheit) von Sankirai 山帰来 (Tu Fu Ling 土茯苓) verwendet.)) Suichikuo 翠竹翁 ist ein anderer Name von Dosan Manase I. 初代曲直瀬道三, der von 1507-1594 lebte. Daraus ersieht man, dass Tu Fu Ling 土茯苓 bei der Behandlung der Syphilis vor 1594 zur Verwendung gekommen ist.

Keizo Dohi 土肥慶蔵 sagt in "Sekai Baidokushi" 世界黴毒史 (Geschichte der Syphilis) folgendes: ((Die gleiche Beschreibung wie die obige Anführung von "Suichikuo Domonsho" 翠竹翁答問書 findet sich in "Dosan Shitei Mondo" 道三師弟問答 (Gespräch zwischen Dosan Manase I. 初代曲直瀬道三 und seinen Schülern).)) Keizo Dohi 土肥慶蔵 findet in diesem Manuskript zwei Datierungen, nämlich 1563 und 1564, und sagt: ((Das weist daraufhin, dass die obige klinische Erfahrung schon 1563-1564 vorgekommen ist.)) Also nach der Meinung von Keizo Dohi 土肥慶蔵 kam Tu Fu Ling 土茯苓 in Japan gegen Syphilis bis spätestens 1564 in Gebrauch.

Merkwürdig ist es, dass weder Dosan Manase I. 初代曲直瀬道三 in "Keitekishu" 啓迪集 (sein grösstes medizinisches Werk in 8 Bänden) und "Nichiyō Yakusei Nodoku" 日用薬性能毒 (Über Vor- und Nachteile von täglichen Arzneien) noch sein Nachfolger, Dosan Manase II. 二代目曲直瀬道三 in "Igaku Tenshoki" 医学天正記 (Sammlung von eigenen klinischen Erfahrungen während der Ära Tensho 天正 bis Keicho 慶長) und "Saiminki" 済民記 (ein medizinisches Werk in 3 Bänden) etwas von Tu Fu

satz und Fisteln wider das Podagram und Gesücht und Lähme der Glieder, zu dem Stein und wider alle Schwachheit, so von kalten Flüssen verursacht werden, auch wider alle Verstopfung der Leber und des Milzes, dem kalten übel dauenden Magen. Und soll dienen zu solchen erzählten Gebrechen einen jeden Menschen, wässerlei Complexion oder Alters er sein mag.

Der Gebrauch dieser Wurzeln wird also zubereitet: Man nimmt der Wurzeln fünf Lot, schneidet sie zu kleinen Scheiblein, weicht sie zwölf Stunde in vier Pfund frisch Brunnenwassers, und lässt es auf die Hälfte einsieden, und von diesem Wasser gibt man des Morgens einen warmen Trunk zum Schwitztrank wie von dem Franzosenholz, danach nimmt man die gesottene Scheiben wiederum, und siedet sie wieder mit frischem Wasser, und braucht solches zu einem gemeinen Trank.

Es hat diese Wurzel solche Kraft und Art in sich, dass sie dem Wasser einen lieblichen Geschmack und schöne Farbe gibt, wenn sie schon zum dritten und vierten Mal wiederum mit frischem Wasser gesotten wird, gleich als wenn es ein gesottenes Zimtwasser wäre.))

Anschliessend fügt Lonicerus eine Anmerkung bei: ((Weitläufig haben von dem Gebrauch dieser Wurzel geschrieben, Andreas Vesalius, Hieronymus Cardanus, und letztlich, J. Palmarius Constantinus, in libro, de lue Venerea.))

Die Anwendung von Tu Fu Ling 土茯苓 wurde in "Wai Ke Zheng Zong" 外科正宗 und in "Wan Bing Hui Chun" 万病回春 ausführlich diskutiert. Das erstere wurde 1577 von Chen Shi Gong 陳実功 und das letztere 1587 von Gong Ting Xian 龔廷賢 verfasst.

Yu Fujikawa 富士川游 berichtet in seinem Werk "Nippon Igakushi" 日本医学史 (Geschichte der Medizin Japans): ((Syphilis tritt in Japan nach "Gekkairoku" 月海録 von Shukei Takeda 武田秀慶 im Jahre 1512 zum ersten Mal auf, und diese neue Krankheit wurde To So 唐瘡 (die chinesische geschwürbildende Krankheit) oder Ryukyu So 琉球瘡 (die geschwürbildende Krankheit der Insel Ryukyu 琉球) genannt.)) Soweit ich in einer partiellen Wiedergabe von "Gekkairoku" 月海録 in einer Zeitschrift "Kanpo" 漢方 gelesen habe, fand ich viele Sätze über Syphilis, aber keine über Tu Fu Ling 土茯苓.

Ein grosses Werk von Dosan Manase I. 初代曲直瀬道三 namens "Keiteki-shu" 啓迪集 erschien im Jahre 1574 n. Chr., Darin bezeichnet Dosan

dass man diese Droge gegen alle möglichen Krankheiten verwendet, nur um auf diese Weise ein gutes Geschäft zu machen.))

Der Autor verdankt die obige Anführung von Andreas Vesalius vor allem der englischen Übersetzung von C. D. O' Malley, der 1965 ein Buch "Andreas Vesalius of Brussels" veröffentlicht hat.

Aus dem Brief von A. Vesalius ersieht man, dass Kaiser Karl V. seine Gelenkschmerzen mit Tu Fu Ling 土茯苓 mit Erfolg behandelte, Vesalius selbst jedoch scheint von der damals etwas übertrieben geschätzten Wirkung dieser Droge nicht ganz überzeugt gewesen zu sein.

E. Bretschneider schreibt, dass Gercia ab Orta, der als Arzt für den portuguisischen Generalgouverneur etwa 30 Jahre in Indien wohnte, in seiner Veröffentlichung "Cologios dos simples et drogas etc.; 1563" u. a. über Tu Fu Ling 土茯苓 sich wie folgt ausdrückt: ((Radix chinae ist wie mehrere andere Heilkräuter in China heimisch und dort als eine ausgezeichnete Arznei gegen Geschlechts- und Hautkrankheiten angesehen. Diese Droge kam in Indien im Jahre 1535 erstmalig zur Verwendung. Die Chinesen nennen sie Lampatam.)) Man erinnere sich daran, dass Tu Fu Ling 土茯苓 nach Li Shi Zhen 李時珍 auch Leng Fan Tuan 冷飯團 heisst! Ohne Zweifel kommt Lampatam aus Leng Fan Tuan 冷飯團.

Nach Bretschneider schreiben auch folgende Autoren über Tu Fu Ling 土茯苓, das sind Trigault in "De Christiana Expeditione apud Sinas suscepta ab Soc. Jesu. Ex P. Mattaei Ricci commentariis, 1615.", Alvarus de Semedo in "Relatione della Grande Monarcia della China, 1643" und Martinus Martini in "Atlas Sinensis, 1655".

Das Kräuterbuch von Adamus Lonicerus berichtet auch über Tu Fu Ling 土茯苓. Dieses Buch erschien 1555 in lateinischer Sprache, und die erste deutsche Ausgabe erfolgte 1578. In der in meinem Besitz befindlichen Ausgabe vom Jahre 1679 findet sich folgende Beschreibung.

((Vor etlichen Jahren ist diese Wurzel in ein solch Lob und Preis kommen, dass sie in viel höherem Wert und Ruhm als das Franzosenholz ist gehalten worden, und ihr die Tugend zugeschrieben, dass sie alle böse Feuchtigkeit der Glieder verzehre, und solche durch den Harn und durch den Schweiß ausführe. Soll also ein besondere Arznei sein zu Heilung der unkeuschen Blattern und aller Unreinigkeit des Leibs, alten Schäden, Rädigkeit, Aus-

die Behandlung von Gicht und die Erhaltung der allgemeinen Gesundheit, aber mehrere spanische Edelleute, die von Tu Fu Ling 土茯苓 begeistert waren, empfahlen ihm diese neu eingeführte chinesische Droge zur Probe. Karl V. liess sich schliesslich überreden, diese Droge einmal anzuwenden, weil man sagte, dass die Droge, Tu Fu Ling 土茯苓, auch nach kurzfristiger Anwendung wirksam genug sei, und keine strenge diätetische Beschränkung wie bei dem Gebrauch von Guajak erforderlich ist. Nachdem Kaiser Karl V. Tu Fu Ling 土茯苓 gebraucht hatte, gewann diese Droge einen so hohen Ruf, dass niemand andere Drogen gebrauchen wollte. Kaiser Karl V. nahm Tu Fu Ling 土茯苓 nur 14 Tage, daher kann man in diesem Fall nicht beurteilen, wieweit Tu Fu Ling 土茯苓 für Gicht wirksam ist. Aber es muss doch gesagt werden, dass der Kaiser, der noch vor einem Jahr nur mit grosser Mühe des Musculus deltoideus seinen linken Arm bewegen konnte, nach dem Gebrauch von Tu Fu Ling 土茯苓 dabei keine Schwierigkeiten mehr hatte. Ausserdem wurde er von hartnäckigen Schmerzen im linken Bein nach dem Gebrauch von Tu Fu Ling 土茯苓 befreit, die Schmerzen waren vor einem Jahr so schlimm gewesen, dass er kaum gehen konnte.))

Über die Herkunft des Namens der Droge "Chyna" hatte A. Vesalius keine richtige Kenntnis. Er schreibt : ((Ich kenne den wirklichen Namen dieser Droge nicht, die verschiedentlich wie Chyna, Chynna, Chynna, Cyna und eventuell auch Echina und Achyana genannt wird. Dieser Name stammt von dem Namen eines Ortes bzw. einer Insel in Indien oder der neuen Welt, von wo diese Droge mit Pfeffer, Nägelein, Ingwer und Zimt von Portuguesen sowie kaiserlichen Schiffsleuten hierher mitgebracht wird. Man sagt, dass die Droge am Seestrand gesammelt wird, und dass sie wahrscheinlich an marschigen Stellen wächst.))

A. Vesalius fügte hinzu : ((Von unserem gemeinsamen Freund, Gerard van Veltwyck, der sich für Botanik sehr interessiert und versucht hat, während seines Aufenthaltes in der Türkei als Missionär alle mögliche Informationen über diese Droge zu erwerben, habe ich nur das folgende erfahren, nämlich ; Die Droge wird in Konstantinopel importiert und ein Jude verwendet sie bei seinen Patienten mit geringerem Erfolg als erwartet. Ich (Gerard van Veltwyck) erwarb von den Kaufleuten keine Informationen als dass sie am Seestrand wächst. Einige Kaufleute behaupten mit Unrecht,

Zi 牽牛子 (Pharbitidis Semen) und koche sie in 6 Teetassen Wasser, bis das Wasser zur Hälfte verdampft. Davon nehme man täglich dreimal! Wenn man den Dekokt einige Male genommen hat, wird die Krankheit gewöhnlich ausgeheilt.)

“Wai Ke Fa Hui” 外科發揮 von Bi Li Qi 薛立齊 erschien 1528. Auch darin wurde über die neue Krankheit Yang Mei Chuang 楊梅瘡 berichtet, und Bi Xie 萆薢 fand u. a. dabei Verwendung. “Xu Yi Shuo” 續醫說 von Yu Bian 俞辨 erschien 1545. Darin wurde diese Droge wahrscheinlich zum ersten Mal Tu Fu Ling 土茯苓 genannt, und über die Wirkung gegen Syphilis wurde berichtet. Syphilis wurde damals in China mit Guang Dong Chuang 廣東瘡 oder Yang Mei Chuang 楊梅瘡 bezeichnet. Guang Dong 廣東 ist nämlich eine südostchinesische Provinz, wo Syphilis in China zum ersten Mal auftrat, und Chuang 瘡 bedeutet etwa Geschwür. Der Name Yang Mei Chuang 楊梅瘡 kommt von der Ähnlichkeit zwischen der Gestalt des Geschwürs und einer Frucht namens Yang Mei 楊梅.

In “Ben Cao Gang Mu” 本草綱目 sagt Li Shi Zhen 李時珍: ((Während der Ära Hong Zhi 弘治 (1488-1505) bis Zheng De 正德 (1506-1521) gab es eine grosse Epidemie von Yang Mei Chuang 楊梅瘡.)) Daraus ersieht man, dass Syphilis in solch einer kurzen Zeit von Europa aus in China eindrang. Li Shi Zhen 李時珍 sagt weiter: ((Zunächst verwendete man dabei Qing Fen 輕粉 (ein Quecksilberpräparat) mit einigem Erfolg, jedoch die Krankheit blieb im Körper verborgen und ergriff die Patienten an Muskeln und Knochen, und sie litten schliesslich an hartnäckigen schweren Geschwüren. Tu Fu Ling 土茯苓 kam in der Zwischenzeit zur Verwendung und gewann einen vorzüglichen Ruf.))

E. Bretschneider schreibt in “History of European botanical discoveries in China”, dass Tu Fu Ling 土茯苓 seit 1535 unter den europäischen Namen wie Redix chinae, Chinawurzel, China root, u. a. in Europa grosse Anerkennung fand.

Die erste genaue europäische Beschreibung über Tu Fu Ling 土茯苓 erfolgte von Andreas Vesalius im Jahre 1546. In “Epistola, rationem modumq; propinandi radicis Chymae decocti, quo nuper inuictissimus CAROLUS V, Imperator usus est, pertractans” berichtet A. Vesalius folgendes: ((Der Kaiser des heiligen römischen Reichs, Karl V. gebrauchte zunächst gerne Guajak für

Jahre 1493 nach ihrer ersten grossen Fahrt wieder in Palos ein. Unmittelbar darauf brach eine Epidemie einer bisher unbekanntem Krankheit aus. "Tratado llamado Fruto de todos los santos contra el mal de la Isla Espanola Hecho per maestro Rodrigo de Isla cirujano vezino de Lisboa para comun e general provecho de los pacientes Enfermos de la semejante Enfermedad que vulgarmente e llamada Bubas" von Rodrigo Ruiz Diaz de Isla berichtet ((Diese Krankheit war ursprünglich auf spanischen Inseln heimisch, einige Mitfahrer von Columbus wurden dort davon befallen, und kaum hatte Columbus der Königin Isabella über seine Reise erzählt, als bereits viele Einwohner von Barcelona diese neue Krankheit bekamen.)) Diese Anführung von Rodrigo Ruiz de Isla wurde mir durch eine frühere Anführung desselben Satzes von Keizo Dohi 土肥慶藏 in seinem Werk "Sekai Baidokushi" 世界梅毒史 (Geschichte der Syphilis) zugänglich.

Keizo Dohi 土肥慶藏 führte in "Sekai Baidokushi" 世界梅毒史 aus einem Werk von N. A. Recchi einige in Amerika einheimischen Behandlungen der Syphilis an. Nach seiner Beschreibung kannten die Leute u. a. folgende innere Arzneien; Sarsaparille, Guajak, Sasafrasholz, Begonia balsimiana, Tuna und Mapuan. Diese Behandlung wurde gleich in Europa eingeführt und unter diesen Arzneien wurde Guajak besonders bevorzugt.

Seit dem Ende des 15. Jahrhunderts wurde der Verkehr zwischen Westen und Osten lebhafter und auch diese neue Krankheit verbreitete sich in Indien und Südwestasien und dann in Südostchina.

Die erste chinesische Beschreibung über Syphilis findet sich in "Shi Shan Yi An" 石山医按 von Wang Ji 汪機. "Shi Shan Yi An" 石山医按 wurde zwischen 1520-1533 verfasst. Darin schreibt Wang Ji 汪機: ((In der letzten Zeit litten viele Frauenhelden an Yang Mei Chuang 楊梅瘡. Sie wurden mit Qing Fen 輕粉 (ein Quecksilberpräparat) behandelt und damit vorläufig geheilt. Aber die Krankheit trat wiederum auf. Wenn sie chronisch wurde, litten die Patienten an hartnäckigen schweren Geschwüren und der Körper wurde starr. Nach Verlauf von mehreren Jahren wurden sie zu lebenden Leichen.)) Wang Ji 汪機 fügt hinzu: ((Man nehme 3 Liang 兩 (eine Gewichtseinheit) von Tu Bi Xie 土萆薢 (ein anderer Name von Tu Fu Ling 土茯苓) und eventuell dazu noch 1 Qian 錢 (eine Gewichtseinheit) von Zao Jia 卓莢 (Gleditschiae Fructus) und 1 Qian 錢 von Qian Niu

2. Medizinische Anwendung von Tu Fu Ling 土茯苓 und ähnlichen Drogen vor dem 15. Jahrhundert

Tu Fu Ling 土茯苓 und ähnliche Drogen galten vor dem 15. Jahrhundert als eine gewöhnliche Droge unter vielen anderen. Es gibt zwar die Beschreibung von Bi Xie 萆薢 bereits in "Shen Nong Ben Cao Jing" 神農本草經 und daher erfährt man: ((Bi Xie 萆薢 heilt Schmerzen und Steifigkeit von Lenden, Gelenkerkrankungen, durch Kälte und Feuchtigkeit hervorgerufene Körperlähmungen, schwer heilbare, bösartige Geschwüre und erhitztes Pneuma.)) Ba Qi 菝葜 ist in "Ming Yi Bie Lu" 名醫別錄 beschrieben, und aus dieser Beschreibung erfährt man: ((Ba Qi 菝葜 heilt durch Kälte hervorgerufene Körperlähmungen, fördert die Funktion des Blutes und hemmt das übermässige Urinieren.)) Aber "Shang Han Lun" 傷寒論 und "Jin Kui Yao Lue" 金匱要略 geben kein Rezept, das Bi Xie 萆薢 oder Ba Qi 菝葜 enthält. Diese beiden Werke sind die ältesten sowie die wichtigsten Rezeptsammlungen in China, die um das Jahr 200 n. Chr. von Zhang Zhong Jing 張仲景 verfasst worden sind. Als erster beschreibt "Zhou Hou Bei Ji Fang" 肘後備急方 (Rezepte für dringende Fälle) von Ge Hong 葛洪 ein Rezept, das Ba Qi 菝葜 enthält. "Zhou Hou Bei Ji Fang" 肘後備急方 wurde später von Tao Hong Jing 陶弘景 revidiert, und dieser fügte mehrere Zusätze bei. Daher weiss man nicht, ob dieses Rezept von Ge Hong 葛洪 oder Tao Hong Jing 陶弘景 stammt. Dieses Rezept ist für Gangstörung wirksam. In den zwei grossen medizinischen Texten aus der Tang 唐-Dynastie, "Qian Jin Yao Fang" 千金要方 und "Wai Tai Mi Yao" 外台秘要 und einer umfangreichen Rezeptsammlung aus der Song 宋-Dynastie, "He Ji Ju Fang" 和劑局方 finden sich verhältnismässig viele Rezepte, die Bi Xie 萆薢 enthalten, aber nur ganz wenige, die Ba Qi 菝葜 enthalten. Diese Rezepte sind hauptsächlich für Gelenk- und Lendenschmerzen, Gangstörung, Impotenz, Enuresis, u. ä. wirksam.

3. Medizinische Anwendung von Tu Fu Ling 土茯苓 im 16. und 17. Jahrhundert

Es ist bekannt, dass Syphilis am Ende des 15. Jahrhunderts vom neu entdeckten Festland Amerika aus in Europa eindrang und sich in kurzer Zeit über ganz Europa verbreitete. Columbus und seine Mitfahrer trafen im

Droge namens Yu Yu Liang 禹余糧, die in "Shen Nong Ben Cao Jing" 神農本草經 und unter deren oberklassigen Drogen beschrieben ist. Nach Tao Hong Jing 陶弘景, der um das Jahr 500 n. Chr. "Shen Nong Ben Cao Jing" 神農本草經 revidierte, nannte man seinerzeit in Südchina die Wurzel einer Ba Qi 菝葜 ähnlichen Pflanze Yu Yu Liang 禹余糧. Tao Hong Jing 陶弘景 sagt: ((Yu Yu Liang 禹余糧 wurde deshalb so genannt, weil der erste Kaiser von der Xia 夏 -Dynastie namens Yu 禹 während seiner Wanderung im Gebirge diese Wurzel als Nährstoff gebraucht und Überreste davon weggeworfen hat.)) Yu Yu Liang 禹余糧 bedeutet nämlich Speisereste von 禹. Einige andere oben genannten Namen von Tu Fu Ling 土茯苓 wie Cao Yu Yu Liang 草禹余糧 (vegetarische Speisereste von Yu 禹), Xian Yi Liang 仙遺糧 (phantastische Speisereste), Leng Fan Tuan 冷飯團 (kalte Knödel), Ying Fan 硬飯 (harte Speise) und Shan Di Li 山地栗 (Bergkastanien) stammen ebenfalls aus dieser Überlieferung.

Von den genannten drei Kräutern scheinen Bi Xie 萆薢 und Ba Qi 菝葜 auch in Japan einheimisch zu sein, während Tu Fu Ling 土茯苓 in Japan nicht vorkommt. Bi Xie 萆薢 heisst in Japan Tokoro ところ und Ba Qi 菝葜 Sarutori さるとり oder Sarutoriibara さるとりいばら. Die beiden Pflanzen wurden oft in der alten japanischen Literatur erwähnt. Tu Fu Ling 土茯苓 wurde erst in der späteren Zeit in Japan eingeführt, und von den Japanern Sankirai 山婦来 genannt. Nach der Meinung von Tomitaro Makino 牧野富太郎 stammt dieser Name aus einem chinesischen Wort, nämlich Shan Qi Liang 山奇糧, das etwa einen schätzenswerten Nährstoff im Gebirge bedeutet. Nach Ryoan Terajima 寺島良安, der 1713 eine Enzyklopädie namens "Wakan Sansai Zue" 和漢三才図会 (Illustrierte Enzyklopädie von Japan und China) verfasste, hat der Name Sankirai 山婦来 den folgenden Ursprung: ((Die an schwerer Syphilis Leidenden wurden oft ins Gebirge gebracht und dort ihrem Schicksal überlassen. Später aber assen einige Ausgesetzten Tu Fu Ling 土茯苓 im Gebirge und dadurch gelang es ihnen, ihre Gesundheit wieder herzustellen und nach Hause zurückzukommen.)) San 山 bedeutet nämlich Gebirge und Kirai 婦来 die Heimkehr. Da Tu Fu Ling 土茯苓 in Japan nicht wächst, wurde an Stelle dieser Droge Ba Qi 菝葜 oft verwendet. Daher wird Ba Qi 菝葜 in Japan Wa no Sankirai 和の山婦来 (japan. Sankirai 山婦来) genannt.

Kurze Geschichte von einem chinesischen Heilkraut Tu Fu Ling 土茯苓 (Chinawurzel)

Von Yasuo Otsuka 大塚恭男

1. Einleitung

Der Name Tu Fu Ling 土茯苓 erschien in chinesischen Kräuterbüchern erstmalig in "Ben Cao Gang Mu" 本草綱目 (1590) von Li Shi Zhen 李時珍 (1518—1593). Nach Li Shi Zhen 李時珍 verwechselte man früher diese Droge mit den zwei anderen Heilkräutern, Bi Xie 萆薢 und Ba Qi 菝葜. Bi Xie 萆薢 wurde bereits in "Shen Nong Ben Cao Jing" 神農本草經, der ältesten chinesischen Materia medica, und unter deren mittelklassigen Drogen und Ba Qi 菝葜 in "Ming Yi Bie Lu" 名醫別錄 (Ergänzung von "Shen Nong Ben Cao Jing" 神農本草經) und unter deren mittelklassigen Drogen beschrieben. In "Ben Cao Gang Mu" 本草綱目 sagt Li Shi Zhen 李時珍: ((Die heutigen Leute halten Tu Fu Ling 土茯苓 für Bi Xie 萆薢, aber das sind zwei verschiedene Dinge.)) Weiter erklärte er: ((Tu Fu Ling 土茯苓, Bi Xie 萆薢 und Ba Qi 菝葜 unterscheiden sich in Ihrem Aussehen, jedoch ihre Wirkung ist ähnlich.)) Tu Fu Ling 土茯苓 hatte nach Li Shi Zhen 李時珍 verschiedene Namen wie folgt; Tu Bi Xie 土萆薢 La Zhu Ling 刺豬苓, Shan Zu Fen 山豬糞, Cao Yu Yu Liang 草禹余糧, Xian Yi Liang 仙余糧, Len Fan Tuan 冷飯團, Ying Fan 硬飯 und Shan Di Li 山地栗.

Die Identifizierung dieser drei Heilkräuter mit den modernen botanischen Namen wurde von einem grossen japanischen Botaniker Tomitaro Makino 牧野富太郎 folgendermassen gemacht: Tu Fu Ling 土茯苓 ist *Smilax glabra* Roxb., Bi Xie 萆薢 ist entweder *Smilax stenopetala* A. Grey oder *Dioscorea tenuipes* Franch. et Sav. und Ba Qi 菝葜 ist *Smilax China* L.. Heute ist es aber im allgemeinen angenommen, dass Bi Xie 萆薢 nicht *Smilax stenopetala* A. Grey, sondern *Dioscorea tenuipes* Franch. et Sav. ist.

Was die Geschichte von Tu Fu Ling 土茯苓 noch komplizierter gemacht hat, ist die Verwechslung von Tu Fu Ling 土茯苓 mit einer mineralischen

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 13. No. 4

March, 1968

CONTENTS

Original articles

- Yao, a Daughter of Genpaku SugitaTomio Ogata...(1)
Situations of the Transference of the National
Institute for Infectious Diseases in Tokyo from
the Ministry of Home Affairs to the Ministry
of Education in 1914. Part 2.Motoo Aki...(19)
Sadahiko Hirano and his Anatomical Chart
..... Akitomo Matsuki...(41)
How to Read Japanese Letters of the Early Modern
TimeKeisho Hakura...(49)
Short History of a Chinese Medicinal Plant Tu Fu
Ling (China Root).....Yasuo Otsuka...(1)
Notes from monthly meetings(52)
Miscellaneous(54)
-

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo.